

# 翻刻資料 佐賀県立図書館所蔵 『佐賀紀聞』

翻刻・校訂者 生馬寛信

串間聖剛

Reprinted Material "SAGA-KIBUN (Record of personal experiences in Saga-han)"

Owned by Saga Prefectural Library

Hironobu IKUMA

Masayoshi KUSHIMA

## 要旨

本稿は佐賀県立図書館所蔵『佐賀紀聞』の翻刻である。

『佐賀紀聞』は他国者による佐賀藩見聞記録であるが、筆者は不詳、原本は所在不明で、本稿は写本を底本としている。

鍋島報効会、佐賀県立図書館、佐賀大学図書館は『西肥聞書』などの表題で、ほぼ同じ内容の異本を数点所蔵している。また国立国会図書館など全国に異本が多く伝来している。今回翻刻の『佐賀紀聞』は、他の異本より、学校関係の記述内容が豊富で、また会津藩など他藩の学校見聞が追加されている。これまで翻刻はされていない。

『佐賀紀聞』の成立は、本文中の記述から、第十代藩主鍋島直正治世の天保十二年頃と考えられる。この時代、佐賀藩の天保改革は緒に就いたばかりであり、大きく動き始めていた。特に藩校弘道館は改革の拠点と位置づけられていたから、改革人材が集められ、人材養成にも力を入れていた。他国人の関心もそこにあつたのだろう。本史料により、当時

の佐賀藩における制度や出来事、情勢、改革の動向、とくに学校の状況をかなりよく把握できる。

他国者による当時の佐賀藩に対する評価やその視点、また他藩の有力藩校の評判など興味深い記述が見える。佐賀藩制史及び諸藩教育史研究の重要な史料であるといえる。

県内の諸異本と比較考証しながら、翻刻作業を行った。

## 解題

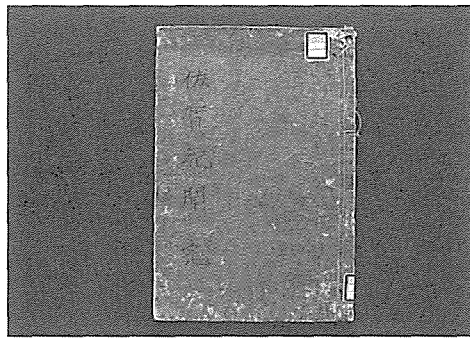
### 一 書誌事項について

『佐賀紀聞』（図309・1、以下「本史料」）は、法量タテ26.7センチ・ヨコ18.4センチ、丁数は33丁の糸綴じされた冊子文書である。薄紺色の表紙には、左側に「佐賀紀聞 完」と直接墨書されている。文書の保存状態は、虫損・破損などの損傷も少なく、比較的良好であり、作成当時の原

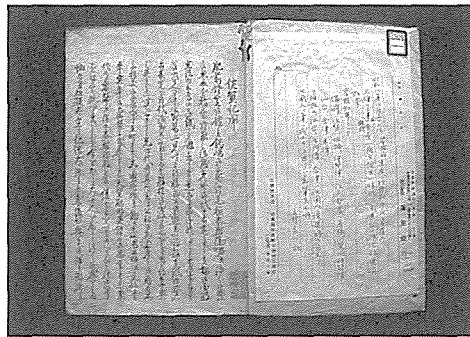
形がよく保たれた状態であるといえる。

表紙の裏面には、「蓬萊銀行」の野紙を用いたペン書きのメモが貼付されており、その内容は次のようなものである。

「昭和八年十月五日 大阪日本橋筋書店村井和本店ヨリ買入、天保十二年丑、執政安房（須古領主）時代、閑叟公ノ御治政見聞記ナリ、学校記事トシテ備前、佐賀、姫路、伊勢津、江戸督学、彦根、笠間時習館、仙台、会津、米澤、ヲ附記ス、仙台ノ不成績、会津ノ他国人優遇特二目立ツ、他国人ノ筆ニ成ルモノト思フ、乍去筆者不明、石井良一記」



写真① 佐賀県立図書館本『佐賀紀聞』表紙



写真② 佐賀県立図書館本『佐賀紀聞』冒頭

これによると、まず本史料の伝来については、昭和八年（1933）に大阪の古書店から石井良一により購入され、その後、昭和三十九年（1964）に佐賀県立図書館へ寄贈されている。<sup>①</sup>石井氏は筆写は不明、「他国人の筆」ではないかと述べている。<sup>②</sup>これはおそらく、他藩に関する記述が詳細であるためであると思われる。

## 二 異本について

本史料の原本については、管見の限りでは未見である。しかし、前述のように本史料は多くの異本が存在する。国文学研究資料館の『日本古典籍総合目録』<sup>③</sup>によると、『佐賀紀聞』は国立国会図書館・京都大学・東大史料編纂所・東北大学狩野文庫・大阪府立中之島図書館・広島市立中央図書館に異本が存在していることが分かる。佐賀県立図書館が所管・所蔵するものだけでも、本史料以外に次の五本の異本が存在している。

- ・鍋島文庫本『西肥開書』（鍋300・10）  
丁数39丁、タテ23.9センチ、ヨコ16.4センチ
- ・鍋島文庫本『西肥開書』（鍋300・11）  
丁数28丁、タテ24センチ、ヨコ16.9センチ
- ・蓮池文庫本『西肥秘聞』（蓮309・108）  
丁数47丁、タテ24.3センチ、ヨコ16.2センチ
- ・鍋島文庫本『西肥秘聞』（鍋309・113）  
丁数51丁、タテ26.4センチ、ヨコ18.4センチ
- ・佐賀大学図書館本『佐賀紀聞』（図309・2・複写本）  
丁数29丁、タテ24センチ、ヨコ16センチ

なお、各異本の詳細な書誌情報については別添の資料を参考されたい。

## 三 異本の系統について

では、『佐賀紀聞』の異本の系統について、筆者が調査を終えた佐賀県立図書館が所管・所蔵する異本を用いて考察を行うこととする。本史料とこれらの異本間では、項目及び内容に異同が存在するが、これについてまとめたものが表①である。この表①によると、構成上、四つの系

統を見いだすことができる。

第一の系統は、『西肥聞書』（鍋300・10）、『西肥聞書』（鍋300・11）の二冊である。二冊共に101項目から成っており、1～49までの本文の項目と、「佐賀表承合書追加」として50～101までの項目が追加された構成となっている。また、「佐賀学校之記」を含む3項目で、本文と追加部分との重複した内容が見られる。

第二の系統は、『西肥秘聞』（蓮309・108）、『西肥秘聞』（鍋309・113）の二冊である。二冊共に110項目から成っており、第一の系統の101項目の後に、102～103に「肥前」に関する記事、104～105に「長崎」に関する「長崎井澤鎮台」、106～110に「長州」に関する「長州聞書」が追加されている。

第三の系統は、『佐賀紀聞』（図309・2）の一冊（複写本）であり、項目数は94と、異本の中では最も少ないものとなっている。内容的には第一の系統を基本としながら、項目の重複部分がなくなり、項目順も整理されて本文と追加部分が一体となって区別がなくなっている。

そして、第四の系統が本史料であり、第三の系統に「備前」・「佐賀」・「姫路」・「伊勢津」・「彦根」・「笠間時習館」・「仙台」・「会津」・「米沢」の学校に関する記事が追加されているが、他の系統の異本には収録が見られない上で注目される。翻刻の底本とした理由の一つもここにある。

#### 四 今後の課題

『佐賀紀聞』は写本過程で他藩の記事も含めた様々な項目が追加・削除されながら整理されていったと考えられる。全国に伝来する異本の悉皆調査も行い、種々の異本を比較検討しながら、写本過程さらには、本史料の成立過程、背景、意義を明らかにしていきたい。作者の解明にまでたどり着ければなど、課題は多い。

#### 註

(1) 石井良一（一八六九～一九五〇）は、武雄市生まれ。若松市長等を歴任し、一九二二年武雄に蓬萊銀行を創設しその頭取となる。武雄の歴史研究や佐賀県内文化財の保護に尽力。『武雄史』執筆。

(2) 池田史郎は「佐賀城と佐賀城下町の形成」の中で、「佐賀紀聞」のまたの名を「佐賀表承合書」であるとし、久留米藩士村山量弘が著したと推定している。ただし、著者推定の根拠は示されていない。（藤野保編『佐賀藩の総合研究』吉川弘文館一九八七年三一六・三二〇頁）

(3) 国文学研究資料館ホームページ (<http://www.nijl.ac.jp/>)

#### 凡例

- ① 漢字はおおむね常用漢字を使用した。
- ② 人名・地名・官職名・固有名詞に限り、原則として原文の字体を用いた。異体字は使用しなかった。
- ③ 変体仮名は平仮名に改めた。
- ④ 片仮名は原本通り残した。
- ⑤ 合字の「より」は平仮名に改めた。
- ⑥ 傍注は、誤字や疑いがあるときは（ ）（カ）、異本に正しいかもしくは参考となる表記がある場合は（※ ）で表した。
- ⑦ 文章が脱落していると思われるときは「 」で異本より内容を補った。
- ⑧ 字画の不明瞭は■で表した。

『佐賀紀聞』 異本の書誌情報

佐賀県立図書館本『佐賀紀聞』(図309-1)

丁数 表紙、裏表紙を除いて33丁

法量 タテ26.7 cm ヨコ18 cm

表紙 紺色の厚表紙

その他の情報

・表紙の裏面にメモ書き有り(蓬萊銀行用紙)

「昭和八年十月五日 大阪日本橋筋書店村井和本店ヨリ買入、天保十二年丑執政安房(須古領主) 時代、閑叟公ノ御治政見聞記ナリ、学校記事トシテ備前、佐賀、姫路、伊勢津、江戸督学、彦根、笠間時習館、仙台、会津、米澤、ヲ附記ス、仙台ノ不成績、会津ノ他国人優遇特ニ目立ツ、他国人ノ筆ニ成ルモノト思フ乍去筆者不明、石井良一記」

・一部に誤植有り(井内傳右衛門↓井上傳右衛門)

・昭和39年に県立図書館に寄贈

・20丁目裏より以降は日本各地の学校についての記述

鍋島文庫本『西肥聞書』(鍋300-10)

表紙 表紙、裏表紙を除いて39丁

法量 タテ23.9 cm ヨコ16.4 cm

表紙 厚紙

その他の情報

・19丁表より「佐賀表承合書追加」、(各地の記事はなし)

鍋島文庫本『西肥聞書』(鍋300-11)

表紙 表紙、裏表紙を除いて28丁

法量 タテ24 cm ヨコ16.9 cm

表紙 右下に「田中」の文字と朱印有り

その他の情報

・1丁目表の右上に「鍋島家蔵」の印有り

・14丁目表より「佐賀表承合書追加」

蓮池文庫本『西肥秘聞』(蓮309-108)

丁数 表紙、裏表紙を除いて47丁

法量 タテ24.3 cm ヨコ16.2 cm

表紙 薄紺色(花柄)の表紙、表紙に鉛筆で薄く「西肥秘聞」の記述

その他の情報

・若干の水損有り

・14丁目より「佐賀表承合書追加」、29丁目より肥前、長崎、長州に関する記述

鍋島文庫本『西肥秘聞』(鍋309-113)

丁数 表紙、裏表紙を除いて51丁

法量 タテ26.4 cm ヨコ18.4 cm

表紙 紺色の厚表紙、表題は「西肥秘聞 附長崎伊澤鎮臺長州聞書

全」、朱書で表紙に「一番」

その他の情報

・「鍋島家蔵」の野紙を使用

・誤字が目立つ(朱書で訂正済)

・14丁目裏より「佐賀表承合書追加」、30丁裏より肥前、長崎、長州に関する記述

## 佐賀大学図書館本『佐賀紀聞』(図309-2)

丁数 表紙、裏表紙を除いて29丁

法量 タテ24 cm ヨコ16 cm

表紙 表題に「佐賀紀聞 完 古写本」と有り

その他の情報

・佐賀大学付属図書館の印有り(昭和35年11月24日)

・本文の後に写本歴の記述有り

「請 村岡良毅之藏臨写 村岡氏ハ紀藩ノ人重熙ハ雲藩ノ人望月氏 弘化三丙午五月十三日 重熙」

「同年同月臨写 福永忠孝 此記ハ彼ノ藩中ニ認メ候者有之天保十二年之記ニ可有之候、望月氏之話也」

「嘉永元戊申夏六月於霞関邸中写焉 永田義之」

「同年冬十一月写於霞関曹舎 青木方」

「嘉永乙酉晩夏臈写 佐々木鎮」

「嘉永七年甲寅初冬、友人正岡元翼写所乞<sub>而</sub>写之 同年十月十八日 波多野寛柔」

(解題 串間聖剛)

表① 佐賀紀聞(図309-1)と異本の項目対応表

※「通番」は佐賀紀聞(図309-1)の通し番号、アルファベットは異本にしか存在しない項目、( )の番号は各異本ごとの通し番号

通番	第四の系統	第三の系統	第二の系統		第一の系統	
	項目(出だしの文章)	佐賀紀聞 (図309-2)	西肥秘聞 (蓮309-108)	西肥秘聞 (鍋309-113)	西肥聞書 (鍋300-10)	西肥聞書 (鍋300-11)
1	肥前佐賀御領主鍋嶋御家ハ、御先祖泰盛 院勝茂公深く御国政ニ御思慮を被尽、	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)
2	御家の官制大政ニ預り候者僅三人にて御 座候、御家老大勢有之候得共、	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)
3	御家老之下ニ着坐と申は四十八番とて元 四十八家有之、	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)
4	大目付は着坐より相勤、其下ニ目付役平 士・小士より相勤申候、	(4)	(4)	(4)	(4)	(4)
5	惣而諸奉行の上役は着坐より相勤申候得 共、郡官ハ殊ニ被重、	(5)	(5)	(5)	(5)	(5)
6	惣而当侯ニ相成、専冗官を沙汰せられ、 諸事の員数を減省せられし、		(6)	(6)	(6)	(6)
7	君侯御政事を被聴其定日有之、御家老以 下諸奉行等も出仕日相定居申候、	(6)	(7)	(7)	(7)	(7)
8	君侯経蒞之礼ハ月ニ六会より九会との会 日相定り有之、	(7)	(8)	(8)	(8)	(8)
9	諸奉行上役は着坐中より相勤、大抵一役 所着坐参人、	(8)	(9)	(9)	(9)	(9)
10	御家中之禄、家老一萬三千石より千石ま て、着坐千石より貳百石已上、	(9)	(10)	(10)	(10)	(10)
11	惣而儒者を芸家と唱ひ、平士ハ別ニ致し、 学校講談等の事のミ相勤、	(10)	(11)	(11)	(11)	(11)
12	儒者武芸師範共ニ家柄と申事曾而無之、 其人の材藝により可被仰付、	(11)	(12)	(12)	(12)	(12)
13	諸役人皆学校中より選挙之法を以て進用 せらる、	(12)	(13)	(13)	(13)	(13)
14	軍役の制家老七家ニ属す七組有之、家老 ニ不属着坐ニ属し八組有之、	(13)	(14)	(14)	(14)	(14)
15	調練の制、一組宛出張城内之廣地ニて調 練有之、	(14)	(15)	(15)	(15)	(15)
16	惣而佐賀城下町其外宿ニ人家皆表札を懸 申候、	(15)	(16)	(16)	(16)	(16)
17	御領内庄屋ハ千石ニ付一人、其下役ハ村々 村役と申者有之、	(16)	(17)	(17)	(17)	(17)
18	御領内船着之處遊女多く、当侯より遊女 屋御潰シニ罷成、	(17)	(18)	(18)	(18)	(18)
19	天保九年戊戌之夏、六月廿七日洪水ニて 肥前堤下ニ崩し、人家も多く潰し、	(18)	(19)	(19)	(19)	(19)
20	都而諸国町在并往来筋等飲食を鬻き候商 人多く、別て城下等ハ其類多く、	(19)	(20)	(20)	(20)	(20)

第四の系統		第三の系統	第二の系統		第一の系統	
通番	項目 (出だしの文章)	佐賀紀聞 (図309-2)	西肥秘聞 (蓮309-108)	西肥秘聞 (鍋309-113)	西肥聞書 (鍋300-10)	西肥聞書 (鍋300-11)
21	君侯曾て妾を不為置候処、御国ニて御病 氣之時、	(20)	(21)	(21)	(21)	(21)
22	天保十一年庚子之夏長崎御受持場所ニ於 て	(21)	(22)	(22)	(22)	(22)
23	武備の御手当も追々相備、蘭製之新大炮 も大分備り居申候	(22)	(23)	(23)	(23)	(23)
24	惣而近国地祭と唱ひ、村々各其産神祭り 酒肴を調置賓客を招キ候事、	(23)	(24)	(24)	(24)	(24)
25	惣て近国一向宗門之庶民、殊ニ彼の宗門 を崇信し、	(24)	(25)	(25)	(25)	(25)
26	先年五穀不豊、價涌貴にして多く米穀を 蓄ひ候、	(25)	(26)	(26)	(26)	(26)
27	唐津変儀ニ付、御目付衆三地へ下向ニ相 成り、	(26)	(27)	(27)	(27)	(27)
28	先君之祭、家中之諸士ハ素袍烏帽子を着 せし	(27)	(28)	(28)	(28)	(28)
29	君侯御在国之節、御鷹野等ニ被為請て、 時々御領内通行被成候、	(28)	(29)	(29)	(29)	(29)
30	秋の初ニ郡役所ニ而庄や村役を呼寄、御 條目を読聞せ候、村方ニ而ハ、	(29)	(30)	(30)	(30)	(30)
31	凶年救民之御手宛ニ而、村々と小き囲ひ 倉出来、粃穀を蓄置候、	(30)	(31)	(31)	(31)	(31)
32	御領内諸寺之庵等は追々被相止、寺江并 せられ候	(31)	(32)	(32)	(32)	(32)
33	御領内芝居浄瑠璃其外右に準し候事堅く 御制禁ニて、	(32)	(33)	(33)	(33)	(33)
34	惣而御領内遊民を禁せられ、追々職人等 ニ被仰付候	(33)	(34)	(34)	(34)	(34)
35	都而御領内の者致旅行候事、古来より製 禁にて、	(34)	(35)	(35)	(35)	(35)
36	町中の者勝手困究、或者物入有之節は上 へ拝借相願候、	(35)	(36)	(36)	(36)	(36)
37	御家ニて御家中町在共綿服着用可致と申 事ハ古来より御定法之所、	(36)	(37)	(37)	(37)	(37)
38	都而民の病をは深く御憐被成、厚御世話 有之、其一事誠ニ行届候事にて、	(37)	(38)	(38)	(38)	(38)
39	御参府之節御道中為警固御家中武藝上達 之士十人を撰相烈られ、	(38)	(39)	(39)	(39)	(39)
40	都而筑後川筋堤之樹木伐取候者死刑ニ被 行候事、前々より御制禁ニ候所、	(39)	(40)	(40)	(40)	(40)
41	御末家蓮池御領主ハ御家ニ而御三家と唱 ひ候内の一家ニ御坐候、	(40)	(41)	(41)	(41)	(41)
42	君侯日々御自身御政事を御聞被成候以前 ハ、	(41)				

通番	第四の系統 項目（出だしの文章）	第三の系統	第二の系統		第一の系統	
		佐賀紀聞 (図309-2)	西肥秘聞 (蓮309-108)	西肥秘聞 (鍋309-113)	西肥聞書 (鍋300-10)	西肥聞書 (鍋300-11)
43	都而以前之御家老忝其家柄に誇り權威のミ取繕ひ、	(42)	(51)	(51)	(51)	(51)
44	君侯徑筵之節ハ隔日ニ有之、九時政府より被引取候而後の事ニ御座候、	(43)	(52)	(52)	(52)	(52)
45	執政ハ鍋島安房唯忝人、参政四人有之、	(44)	(53)	(53)	(53)	(53)
46	都而官職の制度等ハ追々改革ニ可被成御詮議中ニテ未行候	(45)	(54)	(54)	(54)	(54)
47	寺社町方ハ一官ニ而、寺社奉行忝人着坐より相勤、	(46)	(55)	(55)	(55)	(55)
48	郡中より引越て相勤候者、郡代一人物頭より相勤、	(47)	(56)	(56)	(56)	(56)
49	御蔵方ハ物頭より相勤申候、其属官ニ検見方と申官有之、	(48)	(57)	(57)	(57)	(57)
50	刑法之事ハ盜賊改方と申官有之、平士より相勤、目明シ等相属シ、	(49)	(58)	(58)	(58)	(58)
51	着座只今五十六家有之候、平士手明キ槍共ニ十五組有之、	(50)	(59)	(59)	(59)	(59)
52	軍役の備十五組一組ニ平士百人手明槍百人ニ相当申候、	(51)	(60)	(60)	(60)	(60)
53	戸籍図帳等ハ以前より有之候得共、時世ニ随而土地之形勢改、	(52)	(61)	(61)	(61)	(61)
54	去天保十一年庚子より御領内家毎ニ表札を被為懸、	(53)	(62)	(62)	(62)	(62)
55	御家之刑法ハ五等と相聞申候	(54)	(63)	(63)	(63)	(63)
56	都而刑法之事ハ殊ニ重せられ、追々御詮議に相成、	(55)	(64)	(64)	(64)	(64)
57	古賀藤馬役名ハ御年寄と申候、他国ニ而御用人と申候当り、	(56)	(65)	(65)	(65)	(65)
58	天保六年乙未、佐賀御本丸焼失、且彦山本堂も古来御家より勧請之処、	(57)	(66)	(66)	(66)	(66)
59	君侯御仁徳を以、御国を被成御治候ニ付、	(58)	(67)	(67)	(67)	(67)
60	右之次第ニて、御城御改築之節ハ諸士中より願ニて力を献し、	(59)	(68)	(68)	(68)	(68)
61	都而百姓より富人へ出候私税之事ハ、上より御存寄無之、	(60)	(69)	(69)	(69)	(69)
62	都而米価賤く相なり百姓致困究候節、上より其価を貴く米御買上被成候、	(61)	(71)	(71)	(71)	(71)
63	凶年ニハ究民或ハ年七十以上之者へハ飯料被下置、	(62)	(72)	(72)	(72)	(72)
64	究民拝借等願出候得は、追々御貸渡しニ相成も有之候、	(63)	(73)	(73)	(73)	(73)



通番	第四の系統	第三の系統	第二の系統		第一の系統	
	項目 (出だしの文章)	佐賀紀聞 (図309-2)	西肥秘聞 (蓮309-108)	西肥秘聞 (鍋309-113)	西肥聞書 (鍋300-10)	西肥聞書 (鍋300-11)
65	都而病民等郡代より医者引連候而見舞申候、	(64)	(74)	(74)	(74)	(74)
66	今年正月二度大ニ雪降申候、其節侯直ニ御巡国被成、	(65)	(75)	(75)	(75)	(75)
67	都而御内検ハ至て庶く有之候へ共、御家老知行夥數有之間、	(66)	(76)	(76)	(76)	(76)
68	毎年六月ニ虫供養風祭りと申事有之、	(67)	(77)	(77)	(77)	(77)
A	御改革中芝居之儀は全御停止ニ相成居申候		(78)	(78)	(78)	(78)
69	博打之禁は厳敷候而能行届申候、破り候は即時ニ被召捕多くは徒罪	(68)	(79)	(79)	(79)	(79)
70	都而諸法度寛簡ニて太密過刻之事無之、	(69)	(80)	(80)	(80)	(80)
71	捨子等も御制禁相立居申候	(70)	(81)	(81)	(81)	(81)
72	肥前国ハ陶器之名産有之、大ニ民用を利し他国江も売出候而、	(71)	(82)	(82)	(82)	(82)
73	御領内に天神の祠有之、其神木倒レ候所自然と起申候、	(72)	(83)	(83)	(83)	(83)
74	泰国公御代御国用豊饒ニて諸事御興隆被成、	(73)	(84)	(84)	(84)	(84)
75	直茂公御遺訓二十一條の内 諸事したるき事十二七八あしく有之候	(74)	(85)	(85)	(85)	(85)
76	水戸中納言公御国政御改革ニ付、増田忠八郎と申書生忝人被遣置、	(75)	(86)	(86)	(86)	(86)
77	古賀精里之嫡子ハ則藤馬、次男ハ小太郎殿、	(76)	(70)	(70)	(70)	(70)
78	佐賀学校之記	(77)	(42) (87)	(42) (87)	(42) (87)	(42) (87)
79	以前の弘道館ハ先々御代泰国公古賀精里ニ命し造立、	(78)	(88)	(88)	(88)	(88)
B	只今只の弘道館は精里先生在職之時被建候地面ハ一太身之		(43)	(43)	(43)	(43)
80	執政諸役悉学校へ相詰候事故、書生学業ハ精不精、	(79)	(89)	(89)	(89)	(89)
81	学校武芸稽古之儀ハ教授より続へ掌り申候、		(90)	(90)	(90)	(90)
82	君侯月ニ二度宛御臨学有之	(80)	(91)	(91)	(91)	(91)
83	郡官ハ月ニ二度学校へ出席、君侯も被臨候而講釈有之、	(81)	(92)	(92)	(92)	(92)
84	以前之武芸師範等ハ多ハ不学ニ有之候ニ付、	(82)	(93)	(93)	(93)	(93)

第四の系統		第三の系統	第二の系統		第一の系統	
通番	項目（出だしの文章）	佐賀紀聞 (図309-2)	西肥秘聞 (連309-108)	西肥秘聞 (鍋309-113)	西肥聞書 (鍋300-10)	西肥聞書 (鍋300-11)
C	書生之内上より被撰ニ而諸方ニ遊学せしめられ候	(83)	(94)	(94)	(94)	(94)
85	書生之内上より被撰諸方に遊学被仰付、 帰候へハ学校の役人被仰付、	(84)	(95)	(95)	(95)	(95)
D	居寮生も御擬作三等有之学業上達之志者 一切上より御世話被成下	(85)	(96)	(96)	(96)	(96)
86	都而以前ハ教育之法無御座候故、人才足 り不申、	(86)	(97)	(97)	(97)	(97)
87	君侯臨学之節ハ必詩文題を被揃置、書生 をして日を限り出さしめらる、	(87)	(45)	(45)	(45)	(45)
88	武藝諸流稽古所只今迄ハ各師範之宅ニ有 之処、	(88)	(48)	(48)	(48)	(48)
89	選挙之法、学校ニて教校以下諸役人、出 席諸士中文武之業を試を内試と申候、	(89)	(49)	(49)	(49)	(49)
90	御家中諸士出席致候は、前髪有之頃より 二十五歳三十歳迄は	(90)	(44)	(44)	(44)	(44)
91	町学校白小（山）町ニ忝ケ所有之候処、 是又去庚子年より	(91)	(46) (98)	(46) (98)	(46) (98)	(46) (98)
92	郷校ハ在（有）田と申処ニ教諭草場嵯助 月々一度罷越	(92)	(47) (99)	(47) (99)	(47) (99)	(47) (99)
E	御名様日々御自身御政事被成御聴候、以 前は諸役人夫之役所		(50)	(50)	(50)	(50)
93	都而諸家老の領地各学校致所持候	(93)	(100)	(100)	(100)	(100)
94	都而聖廟ハ三ヶ所有之、一ツ弘道館ニ属 し申候	(94)	(101)	(101)	(101)	(101)
95	学校ニヶ処、城中一ヶ処、関谷一ヶ所、 学風朱子学ニ限り他の学風を不用、					
96	武芸は大抵格稽古なり、近来関口流劔術 仕合稽古も仕る、					
97	正月読書始の日は朝より士以上之者大勢 いて麻上下着用にて孝経を読、					
98	関谷学校ハ岡山より十一里程隔り、古三 山の山中ニて要路の地、					
99	佐賀の学校を弘道館といふ、城外大手先 ニあり、					
100	教授一人との教授は井上傳右衛門なり、 其禄本ハ百石程と三百石なり、					
101	助教一人との助教ハ永山十兵衛なり、側 目付役より助教をも勤む、					
102	教諭ト云職あり、助教の下なり					
103	訓導五六人あり、諸生ハ訓導を皆先生と 称す					

通番	第四の系統	第三の系統	第二の系統		第一の系統	
	項目（出だしの文章）	佐賀紀聞 (図309-2)	西肥秘聞 (蓮309-108)	西肥秘聞 (鍋309-113)	西肥聞書 (鍋300-10)	西肥聞書 (鍋300-11)
104	句読習学等の師、数多ありと云					
105	幼年ニテ素読習学等に通る者を外生と称す、寄宿して学好者を内生と称す、					
106	教授職勤る井上ハ老年ニテ、且政事ニも預る故、					
107	江戸屋敷ニも学問所あり、明善堂と称す、句読習学等にて此処にて学、					
108	佐賀之学風、昔より流派と分たす、近來宋の学者は多くなりたる様なれとも、					
109	佐賀侯内外の臣下と談話する事を好ミ、武人ハハ武芸の居、					
110	城内の学校ハ好古堂と云、諸士新学ふ所也、					
111	仁寿山書院地域広大なり、姫路より一里程海濱ニ近くして、					
112	学頭之職ハ草野武介なり役名ハ不覺と云次ニ助教・句読師・目付等有、					
113	仁寿山ハ家中放蕩の子弟教化するを本とす、					
114	熊川舎ハ市人の子出て学ぶ、読書吟味も有り、					
115	学校ニヶ処、津一ヶ所・上野一ヶ所					
116	学校の制、文武を兼教中ハ文学外ハ武芸ニして外廻リニ指南、					
117	職名、督学・助教・句読師等有り、学風ハ流派を定めす、					
118	学士書生を優待して■法を用ひす、					
119	津の学校にて諸文会有り、声律杯吟味する故、人々欲せず、					
120	藤堂家にて学士を庶人よりも取立、督学ニなれば、					
121	学校有れ共其制疎略ニして地域堂宇も狭々なり、徂来学と定、					
122	他国之書生三日ツ、留置、莊司行たる時も講釈を請れ、目付役出て案内す、					
123	仙臺学校有り養賢堂と云、館料一万二千石					
124	仙臺学校の隆盛ならさる訳は、第一領中の人ハ譬学問昇進致し候ても、					
125	民次の策にて学館金を賄し置き、書生の内抜群の者を撰ミて順々兩人位ツ、					

第四の系統		第三の系統	第二の系統		第一の系統	
通番	項目（出だしの文章）	佐賀紀聞 (図309-2)	西肥秘聞 (連309-108)	西肥秘聞 (鍋309-113)	西肥聞書 (鍋300-10)	西肥聞書 (鍋300-11)
126	養賢堂稽古道具は手習の者迄筆紙墨被下、					
127	或曰此一万二千石は近年開墾ニして得たる田を其儘学田ニ用へられしなり、					
128	會津学校城中の中英（央カ）ニ在、大成殿有りて孔子の像を安置ス					
129	学校ニ諸士之子弟十歳より出、尤何歳迄出ると云制はなきと見へて、					
130	児童より講釈を専らす習いしむ、毎十七日講釈吟味有り、					
131	毎月初五日学校中にて詩哥昼の会有り、					
132	子弟一日位不参ニても届等もなし、半日ニて退出する者なし、					
133	当時の学頭阿部井辨之介五百石学校奉行山田瀧口二百五十石					
134	年々四月中花会と云有り、此日家老奉行を始メ諸有司ハ勿論、					
135	若松制士分上下の着等羽折の紐色ニて定む、依て羽織は屹々着す、					
136	一体家中の着服ニ甚鹿服也、只火災有りて出るものゝ装束至て美也、					
137	此外ニ東館・西館とて学問計の館有り、郭外ニ有り、					
138	米澤学校、諸士小路の内御細工町と云、新ニ学校有り、其構至て狭小也、					
139	学館中々常住居者二十人程も有るへし、此人々家中少年の輩へ、					
140	武芸場を御長家と唱々、此長屋へ武芸を学ふ者一ヶ月ニ三度ツ、出業を試む、					
F	君侯之御模様は御聰明にして私欲寡く被為在候御方にて、		(102)	(102)		
G	肥前御藩ニ而当時第一に御手を被為入候義ハ長崎表海辺防禦御手当筋、		(103)	(103)		
H	美作守様ハ是迄浦賀御奉行を被為勤候而去ル申年飢饉の節		(104)	(104)		
I	当時御改革筋数々之御取調ニ而有之候内御■易会所御集議		(105)	(105)		
J	元就公之御創業にて吉川小早川両賢補佐之力を被尽候		(106)	(106)		
K	一藩士之士風甚淳厚にして孝■忠信之実ニ本付切名容気之様子		(107)	(107)		
L	城下元市中者冬以来列而御取締之由ニ而■売屋等		(108)	(108)		

第四の系統		第三の系統	第二の系統		第一の系統	
通番	項目（出だしの文章）	佐賀紀聞 (図309-2)	西肥秘聞 (蓮309-108)	西肥秘聞 (鍋309-113)	西肥聞書 (鍋300-10)	西肥聞書 (鍋300-11)
M	長州御料内者御差出之高ハ三拾六万石余 と申事ニ有之候得共		(109)	(109)		
N	前君侯之御徳義者天下にて御三人之英雄 と奉存候		(110)	(110)		

註 95～98は備前、99～109は佐賀、110～114は姫路、115～120は伊勢津、121は彦根、122は笠間時習館、123～127は仙台、  
128～137は会津、138～140は米澤、F～Gは肥前、H～Iは長崎、J～Nは長州

## 佐賀紀聞

1

肥前佐賀御領主鍋嶋御家ハ、御先祖泰盛院勝茂公深く御国政ニ御思慮を被尽、御家之法度多ハ此御代に相定り申候、扱御国政定法の書、鳥の子紙（※紙）被認置候ニ付、是を鳥の子紙（※紙）と申候、尤此書ニおみてハ御家人ニても容易ニ一見叶わす、勝茂公御逝去以後、政事風俗次第ニ相衰、先々御代治茂公ハ良主にて餘程御国政ニ御心を被用候得共、中興之英主とハ聞ヘ不申候、先御代齊直公ニ至り公私御物入多く、御勝手向甚指支、御家中在町まで大ニ困究仕候、然ル処当公齊直公文政十三年寅年御家督に相成申候、天資聰明英傑の御器量にて、累代の宿弊ヲ除き、泰盛院殿之旧ニ復するを以て御心となされ、御心中を被尽、政を變し令を出し、大ニ士人を勵し、深く民庶を被為恤候ニ付、規模大ニ定り、紀綱大ニ張り、士氣振ひ興り、民俗も漸改り、国勢日々に盛ニ相成り、風声近国を動し申候

2

一御家の官制大政ニ預り候者僅三人にて御座候、御家老大勢有之候得共、執政ハ唯耆人、今鍋嶋安房と申ハ実ハ君侯の異母弟妾腹にて、君侯と同年齡、一万五千石を知行致し学問之力も有之、君侯ニは及不申候得とも元來餘程勉強致候、御国政ニ心懸強く当時專任にて御座候、其外ニ參政耆人、御用人着坐之内より相勤申候、參政を御相談相手井上（※井上）傳右衛門弘道館教授にて兼申候、知行貳百石平士より拔（※拔）んせらる、今番頭ニ至り申候、御家ニ於て非常之拔擢ニ御座候

3

一御家老之下ニ着坐と申者四十八番（※番）とて元四十八家有之、今は五十余家ニ相成申候、是則番頭にて其下ニ手明キ槍頭、下同シ其下ニ徒士頭又其下ニ物頭有之、平士の下手明槍、是を小士と唱ひ、其下徒士にて御坐候

4

一大目付は着坐より相勤、其下ニ目付役、平士・小士より相勤申候、又其下ニ徒目付足輕迄相屬し、都合大勢有之、時諸役所を廻り、或は相詰申候、別諸役の目附と申候耆人も無之候（※ハ）

5

一惣諸奉行の上役は着坐より相勤申候得共、郡官ハ殊ニ被重、上役ハ御家老より相勤、其下ニ郡奉行等之官有之、〔郡代ハ郡中ニ引越相勤申候、郡役所御領内ニ七ヶ所（※一説ニヶ所）、郡代ハ士の内より相勤、助役同格之人式人計、是を上添役と唱ひ、其下ニ小士三人計りより所ニより六七人迄有之、下役足輕五六人より十人余迄有之、惣て郡中之事、教諭・勸戒・慶賞・刑罰等悉く郡代より掌り申候、先御代にては郡代の權輕くして賦税の事のミ掌り來申候處、当侯ニ相成、大ニ委任せられ、大低之事は皆郡役にて決し申候（※低）

6

一惣當侯ニ相成、專冗官を沙汰せられ、諸事の員数を減省せられし、諸役所の体も餘程改變有之候

7

一君侯御政事を被聽其定日有之、御家老以下諸奉行等も出仕日相定居申候、然に當時御国政改革中事務繁多て大抵毎日ニ相成居申候、尤政事を被聞候は常席有之候得共、毎日之事ニ相成候へは、御家老等諸役も申込次第御坐之間へ通り諸事申上、君侯御聞被成候

8

一君侯経筵之礼ハ月ニ六会より九会との会日相定り有之、先御代迄は奥・外様の隔嚴格有之所、当侯ニ相成り内外之分を被破、少も無差別御扱被成、学校よりも大勢罷出、如何にも近（※近）る參り候て講談有之、都（※都）君侯御精神強く被為在候ニ付、日々御読書は不及申、其間は無間斷弓馬等被成候〔君侯元來御弱質ニ被為在候所、右之通御稽古有之故歟、此三ヶ年程ハ殊に康健ニ被為成、僅之御風氣も無之候〕

9 一諸奉行上役は着坐中より相勤、大抵一役所着坐者人、其外士之内より二人或は三人有之、其次手明キ槍より右筆相勤申候、又其外士・足輕等の所より小事ハ相勤、惣諸役の体皆上代、頭・助・丞・目等官制之遺意有之候

10 一御家中之禄、家老一万三千石より千石まで、着坐千石より貳百石已上、平士貳百石より二十石已上、小士十九石より十二石已上、小士已下ハ皆給米ニ御坐候、平士之内給米も少々有之、尤惣本石之渡方ニ御坐候、何の御代よりか右本石のうち式分引下ニ相成り候、是ハ田地永荒其外等之引地ニ付ての事ニ御坐候

11 一惣儒者を芸家と唱ひ、平士ハ別ニ致し、学校講談等の事のミ相勤、官府の政治等ハ預り不申事近代諸国之習之處、肥前にてハ曾て平士儒者の分け無之、儒者も諸政事ニ任し、平士も教講の官を相勤申候

12 一儒者武芸師範共ニ家柄申事曾無之、其人の材芸により可被仰付、是御当代の定てハ無之、古来の御家の定法ニ御坐候

13 一諸役人皆学校中より選挙之法を以て進用せらる、総學校の制、選挙の法備りたる事ニ御坐候、学校の事ハ事殊ニ多く此處ニ記し候てハ難見候ニ付、郷校町学校等惣學校ニ係り候事件一断ニ集め卷末ニ記す

14 一軍役の制家老七家ニ属す七組有之、家老ニ不属着坐ニ属し八組有之、都合十五組、一組の制家老一人・着坐一人・手明キ槍頭一人・徒士足輕も有之、組子之數平士・手明キ槍同人数ニて徒士ハ殊ニ少く御坐候、徒士ハ旗下の弓鉄砲を受持、足輕ハ元より先手の弓・鉄砲・長柄を受持申候、長柄組足輕も兼相定り、其内平常請役所へ出候足

輕の外、軍役計相勤候足輕ハ商売相免し、町人同様ニ町方ニ住居致せる者夥敷事ニて數不相知

15 一調練の制、一組宛出張城内之広地ニて調練有之、尤年ニ式度計君侯御覽被成候調練以前より有之来り候得共、当君ニ相成り別盛んに被行、時より城下より二里計大野原と申所ニて調練有之候

16 一惣佐賀城下町其外宿人家皆表札を懸申候、手明槍等ハ大なる表札等かけ、足輕町人等皆小札等掛申候、足輕ハ其名字を記し候て町人ニ混せざる様ニ致し置候、是ハ当君御思召にて天保十一年庚子より相始申候

17 一御領内庄屋ハ千石ニ付一人、其下役ハ村々村役と申者有之、大庄やと申候ハ惣て古来無之候

18 一御領内船着之處遊女多く、当侯より遊女屋御潰シ罷成、郷ニ至り壱所も無之候

19 一天保九年戊戌之夏、六月廿七日洪水ニて肥前堤下ニ崩レ、人家も多く潰レ、民大ニ苦シミ候、翌日君侯半天股引御着、徒歩ニて村々御廻り被成、水損之處御見分、究民御救等被指出候、御通行之路傍耕作等致居候百姓坏、曾て遠慮致す不及段、以前より御触有之候、久留米御城向下野と申所堤も二ヶ所壞レ申候ニ付、此所も御見分可被為在候處、御城向之事故御遠慮之趣ニて御見分無之、其年下野まで究民之談ニて九度まで御救米頂戴致候者有之由申候、此一事ニても君侯の民を被為恤御政之行届候段ハ相知申候

20 一都<sup>面</sup>諸国町在<sup>并</sup>往来道筋等飲食を鬻<sup>ニ</sup>候商人多く、別て城下等ハ其類多く、風俗奢侈の一事<sup>ニ</sup>有之所、不可然儀<sup>ニ</sup>思召、飲食を商<sup>ニ</sup>候儀御制禁<sup>ニ</sup>相成り、唯旅人の為にとて、一町<sup>ニ</sup>一軒宛御定<sup>ニ</sup>相成候

21 一君侯曾て妾を不為置候処、御国<sup>ニ</sup>て御病氣之時、御小姓計<sup>ニ</sup>てハ御看病等も十分行届不申候<sup>ニ</sup>付、御家老中より御勸メ申上候<sup>ニ</sup>付、妾被召抱候、其時被仰候<sup>ニ</sup>は容儀の沙汰<sup>ニ</sup>不及、只々実体之者撰可申との御事<sup>ニ</sup>御坐候、則平土某の女被為召仕候、平日衣服等も儉素<sup>ニ</sup>て国侯の姫妾<sup>ニ</sup>とハ見へ不申候

22 一 天保十一年庚子之夏、長崎御受持場所<sup>ニ</sup>於て二日大炮を御試被成候、君侯ハ船<sup>ニ</sup>乗、軍中の容を御覧被成候、其日長崎奉行為見分出張<sup>ニ</sup>相成り候、山海震動して長崎の人も大<sup>ニ</sup>驚き申候

23 一 武備の御手当も追々相備、蘭製之新大炮も大分備り居申候

24 一 惣<sup>面</sup>近国地祭と唱ひ、村々各其座神祭り酒肴を調置賓客を招<sup>キ</sup>候事、近代の風俗<sup>ニ</sup>御坐候、佐賀御領内も其通り<sup>ニ</sup>候処、庚子年御触も有之、御領内不残十一月十五日<sup>ニ</sup>祭を致し候様<sup>ニ</sup>被仰付、尤此儀は先三<sup>ツ</sup>年を限り候<sup>面</sup>被為成候、若宜敷無御座候ハ、旧<sup>ニ</sup>復し可申御趣意之由

25 一 惣て近国一向宗門之庶民、殊<sup>ニ</sup>彼の宗門を崇信し、年<sup>ニ</sup>金銀米錢を本願寺<sup>ニ</sup>贈り候事夥敷、佐賀御領も同様の所、庚子之年御触有之、本山贈送致し候事一切制禁と相成申候

26 一 先年五穀不豊、「米」価涌貴にして多く米穀を蓄<sup>ニ</sup>候富民、勢<sup>ニ</sup>乘して大利を罔し、日々に飯米を買候<sup>面</sup>僅<sup>ニ</sup>飢を凌きし<sup>益</sup>盆民等ハ甚敷困究<sup>ニ</sup>

及候、其節多く米を御出被成、御救有之故、時を伺ふ富民望を失ひ、益民大感悦致候よし

27 一 唐津変儀<sup>ニ</sup>付、御目付衆<sup>三</sup>地<sup>（※池）</sup>へ下向<sup>ニ</sup>相成り、其節佐賀御役人数人彼地へ罷越居候、各の宿へハ下人計留置、頭の宿へ寄合居候、夫故一和致し、何事申来候<sup>面</sup>も評義速<sup>ニ</sup>整ひ、即時之返答出来申候、惣<sup>面</sup>諸役人之体皆如此<sup>ニ</sup>聞申候

28 一 先君之祭、家中之諸士ハ素袍烏帽子を着せし<sup>（※せしめらる）</sup>

29 一 君侯御在国之節、御鷹野等<sup>ニ</sup>被為請て、時々御領内通行被成候、君侯御乗馬<sup>ニ</sup>て小紋之御羽織被為召、御供之士中何レも連不申、御供は諸役人中を被減、士中計馬上<sup>ニ</sup>て、多勢被召連候<sup>面</sup>三十騎も被召連候事も有之、耕作の者不及申、町宿内等<sup>ニ</sup>居候者少しも構無之旨に御坐候

30 一 秋の初<sup>ニ</sup>郡役所<sup>二</sup>面<sup>（※）</sup>庄や村役を呼寄、御條目を読聞せ候、村方<sup>二</sup>面<sup>ハ、</sup>庄屋村役等村々老若男女呼寄読聞せ候、尤年貢収納不怠、刑法を慎ミ、孝養を尽し道理を以て説示し候、都<sup>面</sup>ケ様之事文具のみ成行候ものに候得共、君侯実心を以て民を被治候<sup>ニ</sup>付、教候者も実心を以て説諭候、教を「受る者も」<sup>（※実心）</sup>実<sup>ニ</sup>感服仕候

31 一 凶年救民之御手宛<sup>二</sup>面<sup>（※）</sup>、村々と小き囲ひ倉出来、初穀を蓄置候、年秋の初<sup>ニ</sup>至り、新穀の見積り出来候へハ倉を開きて究民<sup>（※）</sup>へ被下候、最此事飢饉の時より始り申候

32 一 御領内諸寺之庵等は追々被相止、寺<sup>二</sup>江<sup>（※合）</sup>并せられ候



33 一御領内芝居浄瑠璃其外右に準し候事堅く御制禁にて、一切相成り不申候、尤右様之もの他領より入込候儀は尚又相成不申候

34 一惣御領内遊民を禁せられ、追々職人等被仰付候

35 一都御領内の者致旅行候事、古来より製禁にて、当候に至り殊に厳敷相成候、唯豊前彦山は由緒有之御領内同様にて彦山参は不苦候、伊勢参宮ハ願より相済、ぬけ参り等は当候ハ嚴重御制禁にて決相成不申候

36 一町中の者勝手困究、或者物入有之節は上へ拝借相願候、上ハ町代官より貸渡し可相成候、年賦にて返上致候、都御領内富民等金を貸り利足ハ其制限有之、八朱より上一步五厘より高きハ無之候

37 一御家にて御家中町在共綿服着用可致と申事ハ古来より御定法之所、君侯御自身綿服を被為着候事ハ当候より被相始候、又医師之拝領の羽織を着用致候を見るに、木綿にて裏かいきを付有之由一家中物頭以上は是非馬飼置不申候ハ不叶御法候

38 一都民の病をは深く御憐被成、厚御世話有之、其一事誠行届候事にて、庚子の秋助済限村人の話、当村の百姓病氣にて打臥候処、早速被仰付候、先當時の菜料として銭沓メ文被下置、其者の田地は近辺之者より助耕し可申候、庄や看病又は耕作等諸事氣を付可申旨、委細被仰聞候、君侯の民を被相恤候事是一事も推量被致候事

39 一御参府之節、御道中為警固御家中武芸上達之士十人を撰相烈られ、御屋敷へ被残置、御帰国之節ハ、又先年被留置候者を被相烈、右之

通次第を以被召連候、是素より警固の為候へハ、御家中之武芸御引立被成候思召御座候

40 一都筑後川筋堤之樹木伐取候者死刑被行候事、前々より御制禁候所、先年洪水堤危く既壊れ可申勢相見へ、其村之庄屋取計にて数十本の杉木切倒し防留申候付、堤切レ不申候、庄屋事ハ大禁を犯し候事故、覚悟を極メ早速郡役所へ罷越、郡代其趣申通候、郡〔代〕大其功を賞し其罪を免し候趣申聞、其上為褒美右切倒候数十本の杉ことく庄屋へ為取候、扨郡代佐賀表罷越其趣申聞、庄屋事一身の禍を不顧、大禁を犯して大功を立候事神妙之至相聞候間、ケ様の取計申候、政府之御議論も可有之候得とも、私乍不肖郡代被仰付置罷在相勤居候上は、此事限り是非く右之通被仰付可被下候、若右之取計不可然儀被思召候ハ、郡代之私を罪科可被決之趣申述候、則何之異儀も無之、同人首尾も宜敷御座候、抑此一様ハ前年之事、当候御代之事は無之候得とも、御家の人任する事、專一之趣見るに足り候得は、併て是記し申候

41 一御末家蓮池御領主ハ御家三家と唱ひ候内の一家御坐候、当撰津守殿当候之叔父被為相当深く字問を被為好候よし、詩歌を被成候、天姓仁慈之御心深くして民之病苦を被為察、夏ハ溝より田水を汲入る、後ハ水纔相成り汲上るに骨折候者は為褒美鳥目等被下置候、又貧民苗を植るに糞無之者へハ、干鰯等上より御求メ被下候、村々八十已上之ものへハ申出次第米等被下置候、諸政事向行届御領内の庶民上を感じ戴く事ハ、佐賀御領内より都勝レ申候、夫故当候儀、叔父之通り可有之候得ハ宜敷ものと常々御意被成候

42 一君侯日々御自身御政事を御聞被成候、以前ハ諸役人それ〳〵の役所へ出相勤候事朝四ツ時より夕八時まで相定候所、去ル天保十一年庚子より被相改、朝六時より九時までと相定る、夫付君侯素六ツ時過より政府へ被相臨、執政参政列座(※等)侍座、致諸事聴断有之、都諸役人中重役は不及申、郡縣の助役所(※等)に至るまで申出候筋有之候へハ、書付持参政府へ罷出、直御前(※)各読申候、則君侯・執政・参政之人々と其事を議せられ、申出候役人ハ其儀を承り居申候、御尋有之候得ハ直申上、議決候得ハ引取候直取行、決し不申候得ハ決候迄相詰居申候、二日と過る事先ハ無之、郡代の介役相勤候人の物語百姓中より申出候筋有之候得ハ、郡代承り介役の城下(下)罷越居候者(下)申越、助役より相伺、決候へハ直郡代へ申越、即百姓へ申渡候、夫ゆえ諸事速決候壅滞の弊無之、其外諸役の事情皆如此御座候、都吏姦をなして民苦を受る諸事壅滞より生し、諸事の壅滞ハ君相の怠情より生申候、然るに右之通君相精を勵して政を勤候故、諸事壅滞之害無之百弊絶申候

43 一都以前之御家老坏其家柄に誇り權威のミ取繕ひ、軽き人と列座も不致体御座候、是近代諸国之通弊ニ上下否塞、国之衰弊を招キ候事御座候、然る今の執政鍋嶋安房に至り大ニ常格を破り、いかにも簡易無造作にて微賤の人へも親く致し、九時政府より引取候へハ必学校(下)出席致し、学校中(中)は少しも貴賤之差別なく諸士も打雑り、几を連ね席を接へ読書等致し候、天性豪邁の人にて精神氣力飽迄逞敷、朝六時より政府出仕、九時引取候直学校へ出席致、徹夜をなし明六時政府へ出、又九時引取又学校へ出席致候事保有之、右之次第老人等ハ常格の俗見に拘り何角と申ものも有之候へとも、執政如此御座候故、其餘若年之御家老等皆学校に出席、諸士と打雑り一向其差別無之講釈等致候、夫故学寮は御家老の詰候寮

(有力)  
も無之候、尤徒士ハ尊卑の等格別ニ違候故、打雑り不申候、手明槍以上は皆打込ミ御座候、併徒士之中にても志業有之者ハ、学校中給仕取次掃除等諸事任役出候を名として、出席講釈致候、以前ハ御家老夜中扨人に逢ひ候事ハ先無之候処、安房事は申入次第夜中ても居居候者へハ必即時対談致し、小キ一間之内如何も近々罷寄候諸事聞届、其人と共に議論致候、平士至極儉約ニて政府学校へ出候も小倉の単袴を着し候、深く学問を好ミ専ら相勵ミよほど学力も有之、近來至り詩も好て作り申候、是ハ元弘道館寮長相勤当代郡代助役致居候人、曾て安房朱子対読致候事保有之迎、右之事共語申候

44 一君侯経筵之節ハ隔日有之、九時政府より被引取候後之事御座候、是ハ御親類家老役勤之着坐、其餘内臣之輩罷出講説有之候、学校より教諭之官罷出申候、君侯政事学問を御勵被成候上武芸を被成御勵、御馬・槍等無油断御稽古被成、御透豫之暇は暫も無之候

45 一執政ハ鍋嶋安房唯一人、参政四人有之、執政ハ固より国政之万事統べ掌り、参政ハ井田傳右衛門学校を掌り候如く夫々の事を分て掌り候

46 一都官職の制度等ハ追々改革可被成御詮議中ニて未行候

47 一寺社町方ハ一官、寺社奉行老人着坐より相勤、町代官老人物頭より相勤候、其下属官も有之、町代官所ハ一ヶ所有之、町代官より相詰申候、此官町方を掌り候宗旨改等の事を兼申候

48 一郡中より引越て相勤候者、郡代一人物頭より相勤、郡中の事総載役

助役三人平士より相勤、各郡の地幾万石分<sup>(※ワツ分て)</sup>受持申候、其下ニ手明槍より三人相勤、足輕も相属申候、御城下の役所ハ六時より出仕致候得共、郡中百姓之事ハ情勢も「異ニ」御坐候、各郡役所ハ四時より出仕、八時引取、夜ニ入る事も多く有之候、介役三人輪番<sup>(※日)</sup>て一人十人宛御城下へ罷越居諸事致聞次候

49 一御蔵方ハ物頭より相勤申候、其属官ニ検見方と申官有之、平士より相勤申候、秋稼熟之頃不熟之地御百姓中より郡代へ申出、郡代より御蔵方へ懸合、即御蔵方より検見方差出、不熟之处致見分、其稅数相定郡代引渡申候

50 一刑法之事ハ盜賊改方と申官有之、平士より相勤、目明シ等相属シ、郡中盜賊等有之節ハ、即時ニ其郡代の手先を以て召捕候へ共、逃失等致候へハ右盜賊改方へ相達し引渡候、目明等は却<sup>(※ミ)</sup>害を為す者ニ候、是等を持し候<sup>(※ミ)</sup>而姦を察候位にてハ、迎も善法ハ被行間敷候、郡縣ニ懸り之人ハ申居候

51 一着座只今五十六家有之候、平士手明キ槍共二十五組有之、多キハ式百五十人、少キハ二十人有之候、都<sup>(※都)</sup>肥前国ハ御内候高莫大之事ニ付、御家老知行所、殊ニ士の人数も極<sup>(※多)</sup>多く御坐候、手明槍と申儀、以前ハ戦国の時御封疆も只今より大ニ御坐候所、今之通被減候ニ付、御家中無役幼少之者ハ一等格式を落候<sup>(※是)</sup>而手明槍と申候、其名儀ハ平常ニ無役<sup>(※是)</sup>而、非常之節槍一本提候<sup>(※是)</sup>而出候処ニ候

52 一軍役の備十五組一組ニ平士百人手明槍百人ニ相当申候、惣組合<sup>(※而)</sup>士千五百人手明槍千五百人通計三千人ニ相当り申候、尤役付之士も其人數之内ニて足輕ハ老組式百人是又惣組合にて三千人ニ相当申候、訓練

ハ御城内ニ訓練屋敷と申処有之、此屋敷内<sup>(※而)</sup>一組宛訓練有之候、一組上下千餘人ニ御坐候

53 一戸籍図帳等ハ以前より有之候得共、時世<sup>(※而)</sup>土地之形勢改、水流れ候処も変り候故、当候ニ相成り改<sup>(※而)</sup>御調被成、絵図方役人大勢取懸居候て調申候、役人中より郡中へも致出張、止宿仕候<sup>(※而)</sup>戸籍人蓄<sup>(※蓄)</sup>之藉、田畝之數ニ至る迄委細ニ仕立ニ相成候

54 一去天保十一年庚子より御領内家毎ニ表札を被為懸、是役人廻り候節、諸事之取調ニ立寄御便利之為メニ御坐候

55 一御家之刑法ハ五等と相聞申候

磔 獄門 打首 徒罪 笞刑

右之通<sup>(※御)</sup>御坐候、先々御代泰国公<sup>(治茂公)</sup>ハ良主<sup>(※良主)</sup>ニて餘程御国政に御心を被用、御国之政法おさめ釐<sup>(※釐)</sup>卒せられ候事も有之、此御代ニ火罪<sup>(火罪)</sup>・軒罪を御止メ候<sup>(※而)</sup>而徒罪笞罪を相始られ候、徒罪之儀ハ徒罪方と申官有之、平士より相勤徒罪を掌り申候、徒罪屋敷と申所有之、徒罪之者ハ此屋敷内<sup>(※江)</sup>被召置、手明槍より致警固候、尤走り出不申様<sup>(※御)</sup>御手当有之、屋敷内ハ徘徊を許シ申候、徒罪之者へハかせぎいたさせ繩艸履等為作、食を給し上より代錢一日ニ何程ツ、を被下候、其代錢ハ上へ御預り被成候、三年徒罪・七年徒罪<sup>(※而)</sup>其差等間之、年限満候へハ右代錢ハ親類<sup>(江)</sup>被下、親類より世話致シ産業<sup>(※有)</sup>ありつかせ候様御指図有之候

56 一都<sup>(※而)</sup>刑法之事ハ殊ニ重せられ、追々御詮議に相成、只今弘道館教諭草場佐助・原田小四郎・寮長畠内彦次郎、其外役人等数人<sup>(※而)</sup>刑法局を聞<sup>(※聞)</sup>き、法律の事を取掛り調居り申候

57

一古賀藤馬役名ハ御年寄と申候、他国<sup>二</sup>御用人と申候当り、藤馬病氣<sup>二</sup>致卒去候時、君侯御自身御尋可被成候へ共、被仰付候は必定御止メ申上候者可有之思召、慇と不被仰出、御狩之御帰路に藤馬宅は何処<sup>三</sup>有之候哉と御近習<sup>三</sup>之士<sup>江</sup>御尋被成、申上候へハ直<sup>二</sup>御走入被成、御近習之士より僅<sup>三</sup>先へ駆込ミ、藤馬上下台<sup>二</sup>戴セ出候位之事<sup>二</sup>御座候、君侯病床へ御通り被成御懇之御意<sup>二</sup>御自分御葉被下置候、藤馬卒去之後、生時之田莊へ葬申候、君侯御恩命<sup>二</sup>藤馬墓地も地租御免被成候

58

一 天保六年乙未、佐賀御本丸焼失、且彦山本堂も古来御家より勸請之處、是又及焼失、其外近年長崎御屋敷等も焼失<sup>二</sup>付、当年より亥年<sup>（※家内扶持）</sup>まで五<sup>々</sup>年之間家内扶持被下置候ハ、無異義御奉公可申上、左様<sup>二</sup>被仰付被下候様<sup>二</sup>相願被達御聴候處、被仰出候は家中より願之趣、寄特<sup>二</sup>そんし候、然<sup>レ</sup>共、家中之儀ハ天下第一軍役之士<sup>二</sup>て、及困究候<sup>二</sup>は不本意之至り、何時如何なる天災異変可有之やも難計、治世<sup>二</sup>乱を不忘事、武家肝要之義<sup>二</sup>有之、近年側向を始、万端質素節檢相用候は畢竟天災或ハ長崎異変等不慮之備の為に候得は、普請等之儀ハ、追々如何様<sup>二</sup>も可相成、我等小屋懸けに住ひ雨露を凌候事<sup>二</sup>済候、家中之儀は是迄勝手指支候旨、粗聞及心外之事<sup>二</sup>候、上米等之儀は不及心懸候間、家中末々迄成丈ケ質素節檢相用、我等<sup>二</sup>上米致と存し、分限相応<sup>二</sup>武具・馬具等相嗜、長崎表其外異変等出来、我等何時出馬致候共、事欠<sup>二</sup>さる様心掛専らに候、是迄統<sup>二</sup>差支居候事故、急々<sup>（※ハ）</sup>は相調間敷候得共、人々心掛能候<sup>二</sup>て、年年少宛<sup>二</sup>ても取調候意<sup>二</sup>は可相成候間、此旨相心得候様と申事<sup>二</sup>て御家中上米之願は御請不被成候

59

一 君侯御仁徳を以、御国を被成御治候<sup>二</sup>付、在町一同奉感戴大御普請

為御入用、追々所持之金銀献納相願、壹万兩或は貳万兩<sup>二</sup>差出度旨願出候もの五人、其外千兩・二千兩・三千兩追々分限相応献納願出、惣高莫大之金銀高<sup>二</sup>御坐候所、被仰聞旨有之間、一向に御受納不被成候

60 一 右之次第<sup>二</sup>て、御城御改築之節ハ諸士中より願<sup>二</sup>て力を献し、君侯も御出被成候、諸役人各諸士を率候<sup>（※を）</sup>組子分け、土木を運ひ勇々敷有之、弘道館御改造之節も右之通<sup>二</sup>て諸士家々引連罷在、手つから鋤を取、丘を開キ申候

61 一 都<sup>二</sup>百姓より富民へ出候私税之事ハ、上より御存寄無之、たとへハ百姓富民へ約し置候私税出し不申、富民より訴へ出しても上<sup>二</sup>御上<sup>二</sup>は無之、夫故富民兼併いたし貧民是に吞れ候事少く御座候、私税之事御領内<sup>二</sup>加地子と唱ひ申候

62 一 都<sup>二</sup>米価賤く相なり百姓致困究候節、上より其価を貴く米御買上被成候、一昨亥年ハ三万石、去子年ハ五万石御買上に相成候、去年<sup>（天保十年）</sup>ハ米価壹俵<sup>二</sup>付壹分<sup>二</sup>及不申候所、壹分壹米<sup>二</sup>て御買上<sup>二</sup>被相成候、扱其米ハ御城下へハ御差寄ハ無御坐候、直<sup>二</sup>民間へ差遣、或ハ究民御救被下、或ハ米少く価貴く相成候て後、元価<sup>二</sup>て百姓へ御払ひ被成候、是を以百姓大便利を得申候、たとへ均田ハ不取行ても此節平糶之法十分<sup>二</sup>被行候へハ、民の貧富均しく可相成、何分左様<sup>二</sup>行届不申候由郡縣か、り人申居候

63 一 凶年<sup>（※）</sup>ハ究民或ハ年七十以上之者へハ飯料被下置、一ヶ月<sup>（※合）</sup>壹分位之当にて尚其節等有之、君侯御仁徳を以御国を御治被成候<sup>二</sup>付、御領内百姓中致感戴、君侯之御政事ハ尽く百姓之為<sup>二</sup>相成候様而已被成下

候、偏<sup>ニ</sup>御信扱申上候ハ、民間こと〳〵殿様祭り致興<sup>（興カ）</sup>行候

64 一 究民<sup>（窮）</sup>拝借等願出候得は、追々御貸渡し<sup>ニ</sup>相成も有之候、御末家蓮池

候は御仁心被<sup>レ</sup>為在候<sup>（而）</sup>、民を被成御恤候上、小藩之事御仁政も能行  
届申候、御領内百姓借金を上より御返し被下、百姓中より年賦にて  
御取上被成候、是ハ佐賀役人感服致候<sup>（而）</sup>物語申候

65 一 都<sup>（而）</sup>病民等郡代より医者引連候<sup>（而）</sup>見舞申候、貧民ハ御救として銭、或  
ハ米を被下置、医者より薬遣候、其貼敷等郡代迄書出し其薬料上よ  
り御払被成候

66 一 今年正月二度大<sup>ニ</sup>雪降申候、其節侯直<sup>ニ</sup>御巡国被成、郡代之輩へ便宜  
を以究民<sup>（窮）</sup>を被救候様被仰渡候、則追々御倉を開相救申候

67 一 都<sup>（而）</sup>御内檢ハ至て庶<sup>（庶民）</sup>く有之候へ共、御家老知行夥敷有之間、御蔵入  
ハ少く御坐候、君侯御自身の衣食をしほり候<sup>（而）</sup>、士民を御救被成思  
召<sup>ニ</sup>御坐候、平生衣服飲食等如何<sup>（も）</sup>も儉薄<sup>ニ</sup>て平人<sup>（人）</sup>易り不申候、夫故  
御勝手も追々御仕直<sup>ニ</sup>相成申候、民救被<sup>レ</sup>為行届候

68 一 毎年六月<sup>ニ</sup>虫供養風祭りと申事有之、其入用之高は相定居候<sup>（而）</sup>年貢内  
より兼て取分置候、其節惣郡百姓中於庄屋宅酒食被下置候、是は古  
来より之御仕来り<sup>ニ</sup>御坐候

69 一 博打之禁は厳敷候<sup>（而）</sup>能行届申候、破り候は即時<sup>ニ</sup>被召捕多くは徒罪<sup>（三）</sup>  
相成候

70 一 都<sup>（而）</sup>諸法度寛簡<sup>ニ</sup>て太密過刻之事無之、居宅衣服等之制度も其大方立

候<sup>（而）</sup>此の事ハ厳敷禁無之候

71 一 捨子等も御制禁相立居申候

72 一 肥前国ハ陶器之名産有之、大<sup>ニ</sup>民用を利し他国<sup>（江）</sup>も売出候<sup>（而）</sup>御国益<sup>（三）</sup>相  
成候、在田<sup>（在）</sup>と申処、陶を業とし候者一千戸程有之、其近辺之海津船  
着之地伊萬里と申処<sup>（是）</sup>を売候者又千戸程有之、農業を営不申候、  
唯陶を業とし且又繁当作華之地<sup>（而）</sup>風俗薄惡、博奕等を好候儀、先  
在国<sup>（其地）</sup>於て郷校を立られ候儀も教化の爲と申事<sup>（三）</sup>御坐候、是凶年<sup>（凶）</sup>は  
二千戸の民、田地を持候もの無之、兎角致困究候は、先年之凶荒<sup>（三）</sup>  
も全<sup>（全）</sup>御救被下相立申候

73 一 御領内に天神の祠有之、其神木倒<sup>レ</sup>候所自然と起申候、御領内之貴  
賤神力を申立致参詣候所、失火有之、因て上より被仰付其跡を切払  
妖妄を絶申候

74 一 泰国公御代御国用豊饒<sup>ニ</sup>て諸事御興隆被成、御先祖直茂公御廟を佐  
賀に御造立被成、日峰大明神と被号候、造営之規模も至て広大壯麗  
之事<sup>（三）</sup>御祭等も極て嚴重、君侯も被<sup>レ</sup>為臨候、当侯御代<sup>（三）</sup>相成候去庚  
子年より、御祭申上節流鏑馬興行有之候

75 一 直茂公御遺訓<sup>（三）</sup>二十一条の内、諸事したるき事<sup>（三）</sup>七八あしく有之候  
したるきとハ懈惰之語<sup>（三）</sup>西国之方言<sup>（三）</sup>御座候、其余の条々ケ様の事<sup>（三）</sup>聞へ申  
候

76 一 水戸中納言公御国政御改革<sup>（三）</sup>付、増田忠八郎と申書生老人被遣置、  
諸事聞合申上候、薩摩より肥前御国政聞合、法を取べき為儒生老人

被指越、肥前公御留守中ニ参り居申候、君侯御帰国ニ相成候<sup>而</sup>、其事被成御聞被仰候ニは、当今政事も未行届候ニ、他国より来て法を取候由聞き誠に恥敷事<sup>ニ</sup>有之、今年も改候ハ、少し引合<sup>ニ</sup>可相成事も有之、只今参り居候事ハ其時<sup>ニ</sup>非すと<sup>※</sup>述、御断ニ相成引取申候

77 古賀精里之嫡子ハ則藤馬、次男ハ小太郎殿、藤馬子太一郎と申只今御留主居助役相勤、是も人物ニ御座候、精里先生弟洪氏<sup>※</sup>を継候<sup>而</sup>洪助右衛門と申候、是又人材<sup>ニ</sup>て曾て顕要之職<sup>ニ</sup>任候、其事<sup>※</sup>ハ又庸劣<sup>ニ</sup>ハ無之、只今役儀相勤居申候御国之人は、古賀氏人材の絶さるを唱ひ申候

# 佐賀学校之記

弘道館字田三百石之處去年庚子より千石ニ相成候

総教当時執政府より兼る

家老諫早豊前

鍋島若狹

教授番頭格参政

井上<sup>内</sup>傳右衛門教授<sup>ニ</sup>て参政を兼る者其人<sup>ニ</sup>より必定之事<sup>ニ</sup>ハ無之、

古賀精里先生暫時参政被致候

助教徒士頭格側目付

永山十兵衛

教諭四人物頭平士打交相勤

平士 艸場璣助

原田小四郎

福嶋文蔵

都監二人一書都檢三人

訓導十圓此内三等有之

寮長三人<sup>島内カ</sup>島田彦次郎居学生を司る

詩文方三人

執法外来生素読生を司る

右之外句読師等有之

外書生 兵学局 和学局 算学局 蘭学局天文地理之学を司る

右各其師有之、医学館以前ハ別<sup>而</sup>有之候處、此節御取立ニ相成、学校中ニ改作と申事ニ御座候

79 一以前の弘道館ハ先々御代泰国公古賀精里ニ命し造立、候自分弘道館記を御撰ひ関其寧ニ書せしめられ、今ニ学校ニ於て掛物ニ懸り申候、泰国公学問を御好被成文章をも能せられ候、然其此御時までハ僅ニ教学の端を開き候迄<sup>ニ</sup>て御座候、当侯御代ニ相成り大学校の政を被教、人才を被取立諸役人悉学校中より撰挙ニ相成候、去<sup>ル</sup>天保十一年庚子春より新ニ学校を造営せられ去年中ニ引移リニ相成候、其造営之規模ハ委敷相分り不申候得共、書生之居寮三間ニ九十間有之、居寮生多く是<sup>ニ</sup>ても混雜有之、長屋ハ武芸の稽古ニ被定置候

80 一執政諸役悉学校へ相詰候事故、書生学業ハ精不精或ハ優劣等皆執政以下<sup>ニ</sup>自身ニ交接致候て存寄之處ニ御座候、檢察<sup>ニ</sup>て法を被用候<sup>ニ</sup>不及、言語を以て賞罰を加へ候位之事ニ御座候、撰挙之事も其人柄の邪正才量大小得失等の事、能存知候故、夫を以て拔撰ニ相成候、夫ニ付試法も相立居候へ共、唯常例被行候まで<sup>ニ</sup>て有之、尤武芸ハ試法を以其優劣を被考候

81 一学校武芸稽古之儀ハ教授より統へ掌り申候、他の参政<sup>而</sup>武芸の方分<sup>而</sup>掌り候人も有之候

82 一君侯月ニ二度宛御臨学有之

83 一郡官八月ニ二度学校へ出席、君侯も被臨候<sup>而</sup>講釈有之、郡官ニハ元来不学之人も有之候ニ付、熊澤次郎八之集議和書杯被講候

84 一以前之武芸師範等ハ、多ハ不学ニ有之候ニ付、当侯思召ニて是又月ニ而度学校ニて会相立、君侯も被臨候講釈有之

85 一書生之内上より被撰諸方に遊学被仰付、帰候へハ学校の役人被仰付、夫より諸役等相勤、又遊学せしめられ候様之事有之

86 一都而以前ハ教育之法無御座候故、人才足り不申、当侯御代に相成俄ニ人才を育せられ、学校より諸役人選舉ニ相成候故、少々学業出来候へハ直ニ役付等致し、学問は未成就不致候ニ、はや事業ニ連り申候、夫故巨儒大家も出来不申事にて、御家の人は夫を氣遣ニ存候と申事  
〔御座候〕

87 一君侯臨学之節ハ、必詩文題を被摘置、書生をして日を限り出さしめらる、是詩文方の掌る所ニ御座候、又少将御任官御鞍鐙拝領等之節、書生文を獻せらる、有志之士ハ直言諷諫之政も有之、裨益（益路）ある事ニ御座候

88 一武芸諸流稽古所、只今迄ハ各師範之宅ニ有之処、去庚子年より一切私宅之稽古被相止、学校中改作ニ相成候、都而御大家之事故、諸流儀師家殊ニ多く、新影流杯十家程も有之、其外諸流も是ニ準し師家多く有之候処、是又庚子年より被相改一流一家ニ被相定候、学校中ニ於て一流一稽古処ニて被相定候、拟文館の方ハ朝六ッ時より昼八ッ時迄、武芸の方ハ朝六ッ時より昼九ッ時迄、九ッ時より暮六ッ時迄を時を分而出席致候、文武且諸流義之稽古不（※差）抜合様ニ有之候ニ付、出席致候者も大ニ便利宜敷、且又一館中之事は、一統稽古着之俣にて役筋へも罷出、稽古之場へ致出席、一日ニ三事四事も稽古出来申候、且今ニ至り文武之甚盛を極候

89 一選舉之法、学校ニて教授以下諸役人出席、諸士中文武之業を試候を内試と申候、式度被致候、家老以下出席試を会試と申、年ニ二度被行候、其外別段会試と申、不時ニ御座候、右ハ及第之如クニ試候（※古之）而直ニ無用せらる（※通）と申儀ニは無御座候へとも、都而諸役人皆此試法を本として撰用有之

90 一御家中諸士出席致候者、前髪有之頃より二十五歳三十歳迄は是非出席不致候而は相成不申候御制法ニ御座候

91 一町学校白小町ニ（山）壹ヶ所有之候処、是又去庚子年より三ヶ処ニ相成候、尤町代官より之支配ニ御座候、平日町之者出席致候、月々六会程学校中より出張講釈相勤候、其節ハ町役人皆々出席致候

92 一郷校ハ在田（有）と申処ニ、教諭草場璣助月々一度罷越、書を講申候、在田の民ハ陶を業とし風俗悪敷有之故、教化之為と申事ニ御座候

93 一都而諸家老の領地、右学校致所持候、田鶴松学校ハ殊ニ盛ニは陪臣も三人程公ニ（※多入）奉せられ候、又聖廟も有之

94 一都而聖廟ハ三ヶ所有之、一ッ弘道館ニ属し申候、其一ッも御城下ニ有之候、武富文之助掌り申候、是ハ由緒有之聖廟ニ御座候、武富氏ハ先祖明人ニて御座候、元禄中其子孫武富盛介ト申者御領主（江）申出、聖廟建立致度趣相願候、然とも天下ニ聖廟致断絶候へハ御国ニても難被決公辺（※別）御伺ニ相成候、其時公義ニても別国さへヶ様之事有之、公義ニ聖廟無之候而は相濟間敷とて御取立ニ相成候、是則今之聖廟にて御座候、扨其後御許有之候而肥前（※然レハ）も御取立ニ相成、夫より天下の諸国ニも追々聖廟造営に相成候、然其造営ハ公儀之聖廟より遅く御座候へと

も、実に近代聖廟之最初<sup>(佐賀)</sup>有之候由、御国人ハ申候、又田鶴松所持<sup>(佐賀)</sup>致候聖廟ハ聖廟之遺<sup>(佐賀)</sup>御座候、其造営規模も至<sup>(佐賀)</sup>盛備にて御城下之聖廟ニは勝れ申候、尤何れの聖廟も祇尊之礼被取行候

## 備前

95 一 学校ニケ処、城中一ヶ処、閑谷一ヶ所、学風朱子学ニ限り他の学風を不用、王陽明学は役人ニ用る、其外ハ他の学風にて近世備前より名家も追々出れとも用られず、故互ニ相争の勢ありて、当時之様子甚盛<sup>(佐賀)</sup>も見へす

有斐録ニ泉八右衛門評定所ニ列座の時ハ、八右衛門か前<sup>(佐賀)</sup>にては、仮虚妄の事をいふ人なし、国政ニ其益有と見へたり、泉ハ学校奉行なり、此人熊澤の弟なれハ陽明学なるへし、然ハ昔ハ朱子学ニも限らず其器<sup>(佐賀)</sup>当たる人を用たる歟

96 一 武芸は大抵格稽古なり、近來閑口流劔術仕合稽古も仕る、他国より遊歴之諸生抔至る時ハ講堂ニ請して講釈を家中の者聴聞す、講堂ハ上の間に簾を置れ、其内ニ孔子と芳烈公の由、堂上は板敷<sup>(佐賀)</sup>にて着坐之者ハ継上下着、中ノ口にて講師を送迎す、聴衆銘々出て姓名を名乗り挨拶あり、食堂ニ役人餘多居て毎日三度ツ、飯を炊出す、汁香物位ノヨシ、外ニ通<sup>(佐賀)</sup>来る者ハ昼飯汁出す様子なり

97 一 正月読書始の日は朝より士以上之者大勢いて麻上下着用にて孝経を讀、食堂にて饗応あり

98 一 閑谷学校ハ岡山より十一里程隔り、古三山の山中<sup>(佐賀)</sup>にて要路の地、素外輪<sup>(佐賀)</sup>なと巖二里なり、嘗て公儀より諸問ありし事なり

## 佐賀

99 一 佐賀の学校を弘道館といふ、城外大手先<sup>(佐賀)</sup>あり、本ハ今侯の祖父の時ニ始て建たれとも、其規模甚狭少なりしか、今の佐賀侯規制を増して是を大にす、佐賀侯毎日学校ニ臨まる、早朝より八ッ頃迄学中ニ居らる、事度々なり、諸生日々四百人程ツ、出るといふ、佐賀の学校ニて学政統るは頭役及職なり、頭役といふハ執政にて菅人役なり、今頭役ハ鍋島阿波<sup>(佐賀)</sup>なり、佐賀に頭役人を云ニ職あり、甚要職なり、頭役は諸官府を統へ、一國の政事を統へ掌り、頭人諸士之事を掌り、家中平日之事ハ統て是を統轄す、官府の諸役人も職務の事ハ頭役ニ属し、一身の事ハ頭人ニ属し周礼天官地官ノ意ヲ得タルカト思ハル何も家老なり、多くハ公の親類と称する家にて此職を任す、本ハ頭人ニて学政を統たれとも、治と教と両端<sup>(佐賀)</sup>なりて悪しとて、今ハ頭役ニて統る事<sup>(佐賀)</sup>なり、鍋島阿波と云ハ公の庶兄<sup>(佐賀)</sup>ニて辛丑之年二十八歳なり、井内傳兵衛の門人<sup>(佐賀)</sup>ニて良太夫なりと云ふ

100 一 教授一人との教授は井上傳右衛門なり、其禄本ハ百石程と三百石なり、佐賀之禄制ハ倉米をもつて称す、百石は既米百石、三ッ高・四ッ高と云事ハ、公儀其外他家へ対して称する時ハ、三ッ高なれば百石を三百石と称す、四ッ高なれば四百石と称す、佐賀の百石は他の三百石・四百石ニ当る故なり、井上は三ッ高<sup>(佐賀)</sup>ニて九百石ニ当るよしなり

101 一 助教一人との助教ハ永山十兵衛なり、側目付役より助教をも勤む、一説ニ草場佐助も助教なりと云ふ、刑官をも兼るよし也此一説ハ薩摩之家中川添甚之允の説なり、川添ハ遊学して草場の塾<sup>(佐賀)</sup>も半年程在留せしなり、去れとも助教一人と云事ハ佐賀士の説なれば、草場ハ教諭の職かとも思わる



102 一教諭ト云職あり、助教の下なり

103 一訓導五六人あり、諸生ハ訓導を皆先生と称す

104 一句読習学等の師、数多ありと云

105 一幼年ニテ素読習学等に通る者を外生と称す、寄宿して学好者を内生と称す、寄宿生之飯料一日ニ白米五合・菜代十二文なり、是ハ朝夕六文ツ、汁或ハ他品之内迄一色ツ、付、夜は焼塩なり、朔望ハ汁と菜と二色なりといふ

106 一教授職勤る井上ハ老年ニテ、且政事ニモ預る故、一月ニ十七八度二十度位なり、下々の教授ハ日勤なり

107 一江戸屋敷ニモ学問所あり、明善堂と称す、句読習学等にて此処にて学、教授ハ三好左馬之允等なり年四十五六、家中大抵交代なり、右子弟の学者少し

108 一佐賀之学風、昔より流派を分たす、近來宋学の者は多くなりたる様なれとも、さのミ学風之異同を論せず、井上<sup>(四)</sup>なとも本朱子学なれとも其人外淳謹ニして内豪邁なり、儒生の如く学派の同異を論す事をせず、宋儒の説ニモ連僻の事少からずとて、政刑等実用之学ニ心を用ひ、国家の為ニ有用の人材を育するを以て己か任とす、就中厚様之子弟<sup>(安)</sup>をは心を用て教育し、国家の用をなさしめん事勉とす、鍋嶋阿波<sup>(安)</sup>も井上<sup>(四)</sup>か門弟なり、力を尽して教育せしか、今ハ良太夫<sup>(る)</sup>となしとて井上<sup>(四)</sup>も自若ト云、永山も方正謹厚にして事体ニ明ニ才畧あり、言語応対も明敏なり、佐賀の士にては阿波<sup>(安)</sup>と井上<sup>(四)</sup>・永山を三傑と称す

へしと云、草場敦厚にして温<sup>(多)</sup>恭人ともいふへき、されとも剛腹<sup>(多)</sup>ニして断決あり、本家老多某<sup>(多)</sup>の臣なり、多くを直諫せしよりて公の直参<sup>(多)</sup>召出されたりといふ、当時学士の風ハ報国の志を立る事を相共<sup>(多)</sup>庶励<sup>(多)</sup>する由なり

109 一佐賀侯内外の臣下と談話する事を好ミ、武人へハ武芸の居、文学の士ニハ政事の論などをして樂とす、江戸参勤の旅中ニモ常々臣下を近付て談話をなす、或時福岡助太郎旅中ニテ談話之時、君は政事ニ心を尽され候へとも、政事ニモ多端なれハ一定規模なくしてハ万事統へせず、今何を以てか一定の規模とせらる、と問、侯答て礼儀廉恥の四維を張る事、是我一定の規模とする所なりと答られたる由

右、佐賀藩中増田忠次郎・福島介太郎、薩州藩中川添甚之允等の説話

## 姫路

110 一城内の学校ハ好古堂と云、諸士の学ふ所也、聖廟の土地は定りてあれとも未建、祇尊<sup>(多)</sup>もなし、右之外五ヶ所熊川舍町<sup>(多)</sup>有・由義堂高砂・仁寿山奥山村・三木一ヶ所・外一ヶ所、熊川舍・由義堂ハ医生多く出

111 一仁寿山書院地域広大なり、姫路より一里程海浜ニ近くして、外廻り草野武助以前元屋敷立置

本ハ家老川合隼之助別荘なり、眺望至て佳なり、隼之助申出て書院を立

姫路家臣の子弟情游放蕩之者、此内へ入置て文庫有、蔵書多<sup>(シカ)</sup>く

112 一学頭之職ハ草野武介なり役名ハ不覺と云次ニ助教・句読師・目付等

有、待賓寮有、四方の遊歴の書生を留置、饗応も丁寧なり、書院中の書生などをも此に出て遊學士と談論疑論義をも質問し、徒目付などの如き役（へんか）時々出て、來客不自由の事もあらは、可申聞旨候聞す、筆墨紙等も指支なき様供給す

113 一仁寿山ハ家中放蕩の子弟教化するを本とす、杜家・医生・輕き奉公人の子弟等願之上寄宿して學ぶ、三十人程寄宿す、遊歴之客杯講釈之時ハ城下よりも家中の子弟來て聴聞す、上之間にて講す、聴衆次之間に出て銘々姓名を名乗り挨拶有て後着坐す、詩文会有、先年來山陽を招請して正を乞、其外他より來客有時ハ出て正を乞なり、正月は寄宿生帰着す、句読師五六人居残りて來客の講釈を聞事なと有、平日毎朝素読有、句読師居残りて教ゆ、昼後講釈有り

114 一熊川舍ハ市人の子出て學ぶ、讀書吟味も有り、史館御吟味杯の如く町奉行・目付杯出張、朝より終日なり

### 伊勢津

115 一学校ニヶ処、津一ヶ所・上野一ヶ所

津（督学カ）督学石川千之允五百石上野督学小谷佐金五百石

石川ハ丈山より由緒有之、村瀬嘉右衛門門人にて浪人なり、博物を以て聞ふ、書生より立身にて参政の上ニ列す、小谷ハ好て三礼を講す

世子侍読兼参政

元ハ足輕之子の由、江戸にて古賀弥介門人となり学校ニ出身して用人の上坐とか云立場ニなり、国政ニ参預すと云

江戸督学

116 一学校の制、文武を兼教中ハ文学外ハ武芸ニして外廻リニ指南、宿は長屋有

117 一職名、督学・助教・句読師等有り、學風は流派を定めず、助教の中にも川村貞藏、上野の助教服部忠介号竹塙杯有名の士なり、遊歴の士を入れられ共、四方の諸名家をは遠方よりも時々招待有り

118 一學士書生を優待して（寄カ）法を用ひす、江戸督学塩田杯は狂人の如くにて人を罵詈し、水戸杯ハ一日も居られざる人物なれとも怪ます、津坂恒之允杯先年道中にて詩作ニ耽り数日滞留し国元へ帰着、斯日後も一度ハ赦し二度ニ及ひたる時呵れるのみなり

119 一津の学校にて諸文会有り、声律杯吟味する故、人々欲せず、文会は策問有りて、対を出すには法寛にして、仮字にても儀さへ通れハ宜敷ゆへ、人々好て出

120 一藤堂家にて學士を庶人よりも取立、督学ニなれば、文学武芸共ニ管轄し国政をも預聞く程なる故、学校の教盛ニ行わる、彦根等とは大ニ異なりと云り

右の説も符合す、近江書生横山老中口語

### 彦根

121 一学校有れ共其制疎略ニして地域堂宇も狭々なり、徂来學と定、他の學風を用ひす、学校内と外の書生と互ニ相諍り教化行れ難勢なりと云、彦根ハ學士書生を尊敬せず、学校の役ニも徒士位の立場より取立る様の事にて龍公寿（田沢彦八郎と稱す）百石ニ成たるを稀なる事とする位

故、繁昌せず

右、近江浅井郡医生横山左中口語

### 笠間時習館

122 一他国之書生三日ツ、留置、莊司行たる時も講釈を請れ、目付役出て案内す、土間に着座す、聴聞衆番頭以上之者二人ツ、出て次の間間にて姓名を名乗り、上之間ニ不入、此方挨拶有之上ニ一問へ入る、学校中ニ掛札あり、横と豎との二ツ有り、札を横ニ並立掛たるは位付也、豎ハ講釈等を習ふ者を上とす、次ニ五經素読、次ニ四書素読など云様ニ次第して掛並、豎々上下を順々に掛たるは精順なり

### 仙臺

123 一仙臺学校有り養賢堂と云、館料一万二千石荒地等開發<sup>(マ)</sup>にて取務万五六千石六七年前建立、三万金餘掛りたると云、其構へ城郭の如し、寔に大造なり、大成殿・学問所・医学館・槍劍術等の稽古あり、学頭大槻民治其外務の者は館内役家住居也、家中の惣領二男三男あなち此館へ出るに限らず、勝手次第に出候中ニ付、学校へ出るものハ数も少き由、唯々学校を設けたるのミ實なし、此館を建るに評あり、大槻学校を造立せんと中村日向と云家老ニ評せしに、此中村無学者なれ共、学問はよき事ニ心得、何程位ニ出来候哉と大槻問せしに、三千兩位ニ出来へしと答るニ付、中村働キ<sup>面</sup>学校を造立に始り候に、三千兩の分不殘石垣所下組ニ遣ひ仕舞候ニ付、彼是六ヶ敷候処、夫のミ<sup>ニ</sup>捨候様も不相成、金指出し出来上りニ相成候由

以上天保四巳年中村五右衛門話

曰、養賢堂ハ甚壯麗なり、四面外廻り石垣兩下坐目付敷石門前より

玄關前迄出生寮三間梁二十五間位も分、上は三棟講堂は二十五間四方也、養賢堂有りといへとも名聞計り、武文共盛ならず、武は尚々衰ひし、尤日々式百人宛出席有之候得共、手習杯の者多の由、講釈日も二六の日ハ誰、三人の日ハ誰と隔日の様ニ有之候へとも、出候者も名聞の者多しと申事、学頭大槻民次<sup>大當頭格</sup>篤実者也、家大ニ富り、仙台一般<sup>暗</sup>暗<sup>齊</sup>学行れ、太守の師範当路の人暗<sup>齊</sup>学ならざるハ稀ニ候由、他学派を目し候事異端の如く<sup>有</sup>之、依て大槻も彼の風を覺へて手広にいたし候積の由なれ共、好事家にて器局小なる人ニ相見へ、夫故諷諭の徒へは欺れ易きよし、千葉助市杯申は輕薄成俗体の人物なれ共、学頭添役也、加美丹次といへるも学頭添役也、是も俗物のよし

124 一仙臺学校の隆盛ならざる訳は、第一領中の人ハ譬学問昇進致し候ても、金七兩三人扶持より上の禄を受ける事には成兼候作法也ける故、人々文学の志薄く業の進兼候事也、民次ハ仙臺某村里正の子なりしか、譬学業成といへとも作法有りて、終ニ志を得る事なりかたきを以て嘗て計略を旋し、戸籍を除し、他領の人と同様の列となりて在故、却て格も進ミ秩禄も増候也、民次の私智を廻し領国の人別を免れてかく立身せし事の卑劣なる事、敗り疾む者多かりけると也宮本篁村の話ナリトて宮本尚二郎語レリ、篁村ハ七八年仙臺ニ寓居す

125 一民次の策にて学館金を<sup>(取カ)</sup>賄し置き、書生の内拔群の者を撰ミて順々兩人位ツ、昌平学<sup>出</sup>指出<sup>行</sup>爲致候規定ニ極り、最初の国の秀士を二人ツ、為登候所、其学士無<sup>マ</sup>のもの<sup>マ</sup>と三人一年餘り居候内、瘡毒をやミ鼻を落し婦来候<sup>婦来</sup>ニ付、一藩の与論以外の外なり、其事<sup>マ</sup>山シ事<sup>マ</sup>けると云り、同上或曰、養賢堂学頭大槻民次五百石番頭格、御近習見習御次之間諸御前の講、百姓より段々ニ取立ニナリ、添役頭取千葉秀輔二百石

詰所以上、武芸狭川新之允新陰流劍術、渋谷又三郎渋谷流劍術、最上運之允種田流鎗術、日下司馬新八条流馬、綱代左膳雪花流号、松下百舎之助算術、檜口坂八左衛門札、芦野勇吉書、芦野九左衛門御家流、板橋見学尊圓流、各指南へ金五兩ツ、給ふ、添役十人・指南役五人・同見習五人・諸生扱頭取一人・諸生扱五人・各合力金三兩ツ、被下、諸生首立十人合力金二兩ツ、被下、養賢堂掛り大目付二人・添役十人右之外宅々々て指南の者も有り

126 一養賢堂稽古道具(はカ)手習の者迄筆紙墨被下、百姓町人迄も、次男・三男等、往々御用ニ立度旨願、自分物入(ハカ)て出る、五百人位ツ、出て、手習ニハ八百人程も出るよし

文政元年より改め盛(ハカ)成る費用一万兩の見込のよし、出精之者褒美被下、四書五経の類も被下、堀口雄三郎是ハ学校取立ニ付、三千兩指出スにより、徒頭より大番頭(ハカ)なり三百石なる佐藤甚十郎同千五百兩兩度出スより、段々取立大番頭(ハカ)なる須藤左太夫同千五百兩指出スより大番頭(ハカ)なる庄司新七同三千兩出ス、町人より段々大番頭(ハカ)なる、百五十石メ九千兩なり

127 一或曰此一万二千石は近年開墾(ハカ)して得たる田を其儘学田ニ用へられしなり、民次ハ大槻玄澤の従弟なりと聞けり、又曰く学校ハ第二世の時創し、第四世の時修し、其後廢して興させられたり、毎月公来臨して学を試ミ賜ふ、家老も毎月二次出なり、寄宿書生百五十人あり、皆吾人扶持を賜ふ、陪臣の子多し、民次ハ下の目付大莊屋の子なり

### 會津

128 一會津学校城中の中英二在、大成殿有りて孔子の像を安置ス(ハカ)

129 一学校諸士之子弟十歳より出、尤何歳迄出ると云制はなきと見へて、三四十位の者も出る様子也、学問武芸甚勉勵する風也、家中の宗領・二男・三男等日々未明より学問所へ集り読書を学、五ッ半比一統宿所へ帰り朝飯を用ゆ、弁当を携又々出住(ハカ)す、夫よりハ劍術を学ふも有り、槍術を学ふも有り、或ハ一日内劍・槍・長刀杯の術を互ニ学ふ者も有る様子なり、此日は何芸を学日と云定はなき様子見申、譬ハ朝飯後武芸場へ出る、餘人出る事なき時ハ学校場へ廻り、読書致し居者杯も有る様子也

130 一児童より講釈を専らす習(ハカ)いしむ、毎十七日講釈吟味有り、学頭平日先生と称す、今案日新館圖ニ大司成といふハ是なるへし・学問奉行・同添等出席也、格別増進之者へ褒美を賜ふ、其品は台附の硯石を君の紋付たる絹の服さにて包ミたるを賜ふなり此硯を家ニ藏置者数多あり、其外の品を賜ふ事有りや未聞と云

131 一毎月初五日学校中にて詩哥昼の会有り、学校奉行は詩哥等の品題を議し、格別なる者には右之硯を賜ふ、至て風流なる事なり、生徒の内税(ハカ)を増進(ハカ)上り段々に学校中の席を進む、一等二等三等を越へ大 schools 進めは侯より一人扶持を賜ふ、褒美を賜ふ振舞有り図大 schools 十五人と云ハ是なるへし二男三男無息者(ハカ)の類なるへし

132 一子弟一日位不参(ハカ)ても届等もなし、半日(ハカ)て退出する者なし、武芸増進之者は勝手ニ自分宅(ハカ)て芸術を師範をす、依て自分宅(ハカ)て流々の指南する者少からず

一体若松学校を立るは、弓・馬・槍・劍は勿論、学校中へ池を掘り(ハカ)水を儲、水練の稽古等をも学ぶ程二盡く一所(ハカ)合併したれ共、芸術の上ニは流派を趨趣、自分異同有りて派(ハカ)混し難き勢

も有之、最初より今日に至りて学校ニ組入す、自分ニ勝手ニ諸芸を指南する者間々見ゆる也、館中住居、学頭・学問奉行其外指南の者等四人住居す、学問の方ニ世話役と云子弟を教授する役有り図ニ添勤と云ハ是なるへし是等は通勤也

133 一当時の学頭阿部井辨之介五百石、学校奉行山田瀧口二百五十石、添役猪川多仲百五十石、学校下役星庄吾茶紐、日々学館へ出仕す、子弟の稽古を試ミ学校中の黜陟ケツシツ与奪ハ、都て学校奉行の掌振ニ有り、人物の撰、政府へも奉行より出るなるへし、依ヨ講業の子弟も学校奉行をは甚畏敬す、譬ハ子弟の中々くつろけ居たるも学校奉行添役其席を通る時は遽て席を改る程なり、学校の階級は学校奉行の上列する共、其威権は遙シ落たる者なり、昼書カ籍は面々自分物を持参して出れ共、武芸の道具ハ一圓侯よりの手当也

134 一年々四月中花会と云有り、此日家老奉行を始メ諸有司ハ勿論、諸家中井百姓町人まで勝手次第見物を許す、能・囃子・狂言数坐有り、出入町人其芸ニ堪たる者は勝手次第面々思ひしの役動む、其古稚ニて面白しといふ

135 一若松制士分上下の着等羽折（巻）の紐色ニて定む、依て羽織は屹キ着す、只学校へ出るにも以下の者ハ大抵無羽織なり、以上も子供ハは無羽織ニて出るは間々見ゆ

136 一一家家中の着服ニ甚僂服也、只火災有りて出るもの、装束至て美也、他国人一芸ニ長したるものは書画家と雖も其芸道の達不達出所を吟味之上、其下役の者より学校中長官へ申立、寄宿へ淹留せしむる也、何十日何百日寮居さるも心次第、儒者・武芸者朝夕一汁二菜、或は

二之膳を付る事も有り、書家・画家等へも一汁一菜位ニて一等降りたる賄也、芸能有る人を能く優待する風也、然ハ諸方より芸術をもつて来、寮居する人数多有へしと思われ共、兎角平生二三人五六人位也、又一人も不居事も有り、武芸至て達人有故、大抵ノ武人来りては勝事かたし、依て武芸者ハて長滞留する程の者来る事稀也、滞留中館外へ出るニは門戸を司る者ニ断り、左すれば何方江出るも勝手次第也

137 一此外ニ東館・西館とて学問計の館有り、郭外ニ有り、茶紐組より以下惣領・二男等此館江出學問す、武芸ハ一同日新館へ出茶紐は物書等也、徒一等上より譜代なり遊歴之客を養ふへき料として二十人扶持程賄す、役人一人同荒子三四人付置、歳終画会之時振舞出る例なる、由来客居寮少く、右之賄料餘有る時は、餘たるたけを此振舞の費へ増たし、格別に盛饌を設け景物等も多く出す

### 米澤

138 一米澤学校、諸士小路の内御細工町と云、新ニ学校有り、其構至て狭小也、表間口二十間程表通りさつとしたる堀也、小程ニ萱葺門有り、門の正面ニ玄関有り、玄関へ向江東の方ニ纔の廊下有りて書院脇の棟有り、門外より窺見しまてなれハ、広狭何量幾間有るを知らず、され共、僅ニ四五十畳敷ノ間ニ過さる様ニ見る、玄関の右ニも一棟有り、都て萱家上荒壁位ニて其質朴なる造事也、表の堀より二間計空地有りて長七八間程二階造りの長家一棟有り、二階ニ書生有りて読書の声も聞へけり、諸構井家造の様子米澤家中七百石も取し者の居宅也と云位のか、り見へて、其手輕（本）僂抹なる事也

139 一学館中々常住居者二十人程も有るへし、此人々家中少年の輩へ、読書を教ゆると郷導の者云へり、余嘗て聞し諸士の宗領二男三男等随て此館へ出、学問をする定め也、其内秀才の者二十人の限り扶持の賄ひ、館中詰切学問をする、其外自分用とて賄代ハ貫文を出す、詰切居者有ると云、此常住のもの云ハ此等の輩なるへしと思ハる、毎日明六ッ時より揃七ッ時迄読書を学ふ、黄昏より集り夜四ッ比迄退出スト云、扱夜中の業ハ詩文章を学ふとか、又講釈をする杯云にて有へしやと、郷導の者向し其事ハしらすと云、年少手習ハ面々勝手次第<sup>ニ</sup>学ふ事也と云レ、モントウ町と云、諸士小路の内<sup>ニ</sup>芸場有り、表長屋<sup>ニ</sup>て長十四五間二間半梁一棟也、至極颯としたる作事也、中ハ幾ツも仕切、剣槍流<sup>ニ</sup>有り、無学流・新知流と伝流杯云有りと云、此場所の外、処々導者有り

140 一武芸場を御長家と唱々、此長屋へ武芸を学ふ者一ヶ月ニ三度ツ、出業を試む、三年皆出之者<sup>ハ</sup>御吸酒を賜ふ、六ヶ年皆出は御樽二升を結ふ、九年は御樽二升・するめ二連を賜ふ、十二年ハ御樽五升・するめ二連、十五年御樽・塩鯉一尺、十八年ハ御樽五升・塩鯉二尺、廿一年ハ金二百疋、此上出精ハ知行を増し、扶持人は扶持を増と云、尤十年皆出已上は年々御吸酒を賜わる也、扱芸の昇進<sup>ニ</sup>ありては、右定之外ニ格別の称美に也、立身する事も有ると云、学問の同断の事也と云、毎年二月中御物初とて武芸を学ふ人一統へ右之長屋<sup>ニ</sup>て御酒を賜わる、一日ニ四坐ツ、五時・四時・九時・八時三日位ツ、続々と云、学問も同様かと問<sup>ニ</sup>知らず答ふ、武芸は其秋ニ二度ツ、見分有りと云、弓と炮とハ一度ツ、馬術家老の見分、其外芸は武芸頭取と云有り、九十六人九十六人は家柄の大臣也の内、頭役を勤む人の見分也と云、侯在城の折は二度の内一度ハ侯の見分也、支配頭も出席すと云、見分の節鉄炮二放ツ、二十目已上は中り塩硝五升、

一ツ中り拾テヲタマフ凶荒以前ハ四放ツ、なりし云々弓は二本中り弦二指を給ふと云、乗馬は二百石取りよりは是なるてはならぬ定め也、二百石以下<sup>ハ</sup>ハ飼料として一ヶ年金一両ツ、給ふ、士人近來大困<sup>窮</sup>し自分<sup>ニ</sup>て飼置事行届かす、常郷中へ預置、年々九月中見分有し前日六十日程の間、既へ牽入置、見分畢て又々郷中へ預る事也、尤五百石以上は年中自分既へ引通し立置すしてハならむ定也と云、二百石の士人百五十人も有るへしと云り

※ 以下は翻刻の底本に用いた『佐賀紀聞』（図309・1）の項目ではなく、異本（西肥秘聞）（鍋309・113）、『西肥秘聞』（連309・108）に存在する項目である。そのうち肥前に関する項目のみを『西肥秘聞』（鍋309・113）より翻刻した。

## 肥前

F 一君侯之御模様は御聰明にして私欲寡く被為在候御方にて、内寵等一切無之、天性事を被為勤候御生付<sup>ニ</sup>、暫も御隙被為在候得は、必文武之筋を被為勤、御書見御庭立等不被為在日は一日も無之由<sup>ニ</sup>候、惣し御才氣拔群之由<sup>ニ</sup>一鉢之御仕組筋も多く候、先思召にて其後役々之者<sup>ハ</sup>調方被仰付候由<sup>ニ</sup>候、御相談御相手<sup>ニ</sup>相成候人々は、御家老にて鍋嶋安房、相談人<sup>ニ</sup>井内傳右衛門、側目付にて永山十兵衛此三人<sup>ニ</sup>有之由<sup>ニ</sup>、鍋嶋安房と申候人は、実は君侯之御庶兄にて有之候由<sup>ニ</sup>候、須古之家を被継、当時執政を順良にして学問も有之由<sup>ニ</sup>候、井内傳右衛門は精里先生之門人<sup>ニ</sup>程朱之学<sup>ニ</sup>得力有之、段々鉢現発明之跡なと有之、其内一二条も承り候に、如何様活動を心懸候人と相見候、一鉢之様子至<sup>ニ</sup>灑落<sup>ニ</sup>にして、何事も無遠慮話し無如在人物にて有之候得共、余程大物と相見、清濁ともに入れ込、誠<sup>ニ</sup>豁達なる様子にて有之候、彼藩中<sup>ニ</sup>心易人之咄候処を承り候<sup>ニ</sup>も、平日は童の様な義も有之候得共、何事も事変に臨候<sup>ニ</sup>、諸人行当候

節は必人無之処に出候活見有之、一藩之依頼にて有之候由<sup>二</sup>、惣して思長き人にて、新造の面々なと仕組筋果敢取兼候段、嘆息いたし候得は、左様に気短に有之候<sup>二</sup>は相成不申候、當時は誠に結構なる事にて、先ツ不足は無之候、我等は何礼にて有之候哉、君侯之作立、執政も作立候<sup>二</sup>漸々<sup>（※今日）</sup>とるに運来候得は、面々も少しハ了簡いたし候様にと毎々喻解致候由にて、誠に中興之元臣にて有之候、永山十兵衛ハ王陽明之学を信用、賤履力行之士<sup>二</sup>、平日己を責候事切にして、人を責る事薄く、年齢を不挾諸生之中<sup>二</sup>も立雜り、文武之道を研究致候<sup>二</sup>、一藩之子弟も不輕帰服致居候由<sup>二</sup>候、多年之咫尺にて君侯も御信用<sup>二</sup>相成、輔佐之力も有之候由<sup>二</sup>候、其文章之中<sup>二</sup>諫<sup>二</sup>後信とも申候言葉有之候、身上を為申言葉<sup>二</sup>て此一言<sup>二</sup>其人之模様大概相分申候、傳右衛門ハ教授を兼、十兵衛は助教兼、政教一致之御仕組<sup>二</sup>有之候

G 一肥前御藩<sup>二</sup>當時第一に御手を被為入候義ハ長崎表海辺防禦御手当筋、御家中之子弟文武之誘筋、先ツ此二稜にて有之候、長崎表海辺防禦御手当筋ハ、先年異国船入込之砌、御先代様御受持之時分御不手際にて武名を天下に為被失儀を被聞召及候<sup>二</sup>、入々口惜被思召上候間、先第一此御手当筋を御手厚被仰付、今<sup>（今こゝろ）</sup>も賊船参り候ハ、手強御所分有之候<sup>二</sup>、御恥辱を可被晴との御存念<sup>二</sup>有之候由<sup>二</sup>付、御家中之子弟文武御誘筋之御前代様不君<sup>二</sup>、士風大に敗居を御見及被為成候<sup>二</sup>、兼々嘆ケ敷被思召上候間、御家継被為在候<sup>二</sup>、早々文武之筋御世話<sup>二</sup>相成、御城御焼失以後は、別<sup>二</sup>被<sup>二</sup>御心、大造之御普請有之候<sup>二</sup>、弘道館を被為建、学問は勿論武芸も同所<sup>二</sup>一所<sup>二</sup>稽古被仰付、諸芸之師範も想<sup>（様カ）</sup>少数人数之面々に并流被仰付、毎日諸師共<sup>二</sup>学館<sup>二</sup>罷出候<sup>二</sup>稽古被仰付、子弟大概十六歳以上は一統詰方被仰付候、依之當時居寮生百五十人計も有之候<sup>二</sup>、不悟文武共<sup>二</sup>出精いたし候様子<sup>二</sup>有

之候、扨諸生之内大概講習討論も出来候面々ハ、所々遊学被仰付、又自身よりも願出候得は、相応之御心付も被下候<sup>二</sup>被差出候間、大概一度充ハ何も遊学<sup>二</sup>罷出候模様<sup>二</sup>相成居申候、又香焼嶋と申候<sup>二</sup>長崎表<sup>二</sup>御新地<sup>（※）</sup>有之候付、文武出精之子弟内より五十人充被差越置、三ヶ年充三年詰<sup>二</sup>て彼表之番衛を兼、専ら文武芸<sup>二</sup>并船手之稽古等被仰付、長崎表<sup>二</sup>御出之節は、毎々彼島<sup>二</sup>御越<sup>二</sup>相成候<sup>二</sup>、諸士之稽古等御覽被遊候由<sup>二</sup>、子弟之面々も難有奉存候<sup>二</sup>、別<sup>二</sup>出精いたし候様子<sup>二</sup>有之候、又江戸表<sup>二</sup>御参勤之節ハ、子弟之内より三拾人充御供<sup>二</sup>被召連候<sup>二</sup>、彼表<sup>二</sup>江も被残置、又所々<sup>二</sup>江も被差越候<sup>二</sup>、文武共<sup>二</sup>稽古被仰付候、又大身之子弟<sup>二</sup>は居寮等出来兼候面々は、御城中<sup>二</sup>稽古堂と申文武稽古所を被為置、御手元<sup>二</sup>御仕立<sup>二</sup>相成、学問ハ御会読之出席被仰付、武芸ハ御相手を被仰付由<sup>二</sup>、ケ様<sup>二</sup>色々に御手を被<sup>（※カ）</sup>尽候<sup>二</sup>、御世話被相成候間、一藩之子弟文武之道<sup>二</sup>相添き不怪出精いたし候様<sup>（※カ）</sup>子<sup>二</sup>て勸々たる人氣<sup>二</sup>有之候、然し一藩之士風氣注功名客氣の<sup>（※カ）</sup>筋に弛候と相見、重役の面々ハ、当時專鎮定に心を用候由<sup>二</sup>有之候

財団法人鍋島報效会及び佐賀県立図書館には、翻刻の許可や閲覧利用について、格別の便宜をはかつていただきました。

佐賀県立図書館近世史料編纂室長の大園隆二郎氏には、翻刻と校訂に当たって、多大のご教示とご助言をいただきました。

心からお礼申し上げます。

生馬 寛信 (佐賀大学文化教育学部)  
串間 聖剛 (佐賀県立図書館)